

花 熱 花 哀



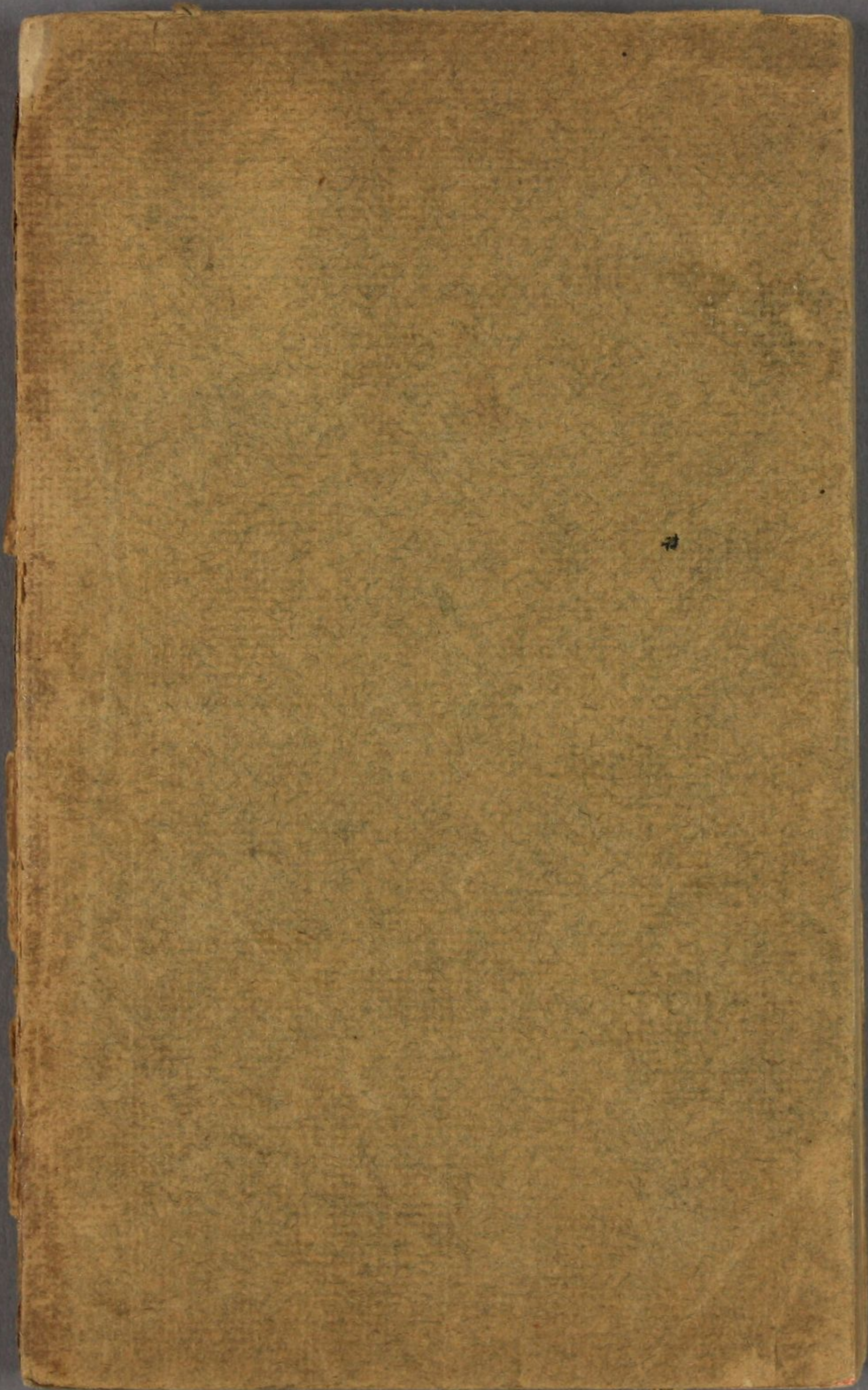


見代文類
卷第十一
編

真花
熱花

兒玉花
外







潑瀨たる刻々の代表的文藝趣味を、最至便に享樂し得べき機關として提供せる我現代文藝叢書が正に甚大なる江湖の歡迎を博し、既刊毎編旬日を出でずして數版を重ねるの光榮に浴したるは、本叢書がいかにも現下の要求に適應せる機宜の計畫たるかを着々事實の上に證し來たるものと被存候

本叢書は小説、脚本の創作以外に於ても、評論、小品、新詩曲のいづれを問はず、其情を選び、其英を抽き、明治文藝の淵藪として、凡てこれ等の粹を網羅せんとするものに候へば以下毎篇文壇の代表的の高潮に駕せる作品を紹介し各の現在に於て、眞に有意義なる現代的文藝の叢書たるに負かざるべく候 以上

春陽堂主人謹白

現代文藝叢書第十一編内容

藝人の悲哀	三	東京の女と柳	五九
泥船	二六	美人像	六七
久世山の夏草	二六	鶯	七〇
二階の下	四〇	苗賣	七二
絶望	五	夏の隅田川	七三

網納屋	八二	風濤の別れ	一〇七
舟中の少年	八九	闇黒	一六
顔	九六	幻影	二八
橋	九九	秋風語	三四
汚れ身	一〇二	鶏	一三八
情熱	一〇三	蟬の音楽	一四〇

女 優	……	一四三
煙草入	……	一四六
南國の女	……	一四七
鱒 雲	……	一五一
女乞食	……	一六〇
圖書館の日	……	一六五
~~~~~		
卓の前	……	一六八
犬	……	一七〇
鷺	……	一七四
雷鳴の夜	……	一八三
鎌倉の半日	……	一八九
病院前	……	一九三
九十九灣の一夜	……	二〇八



哀花熱花

藝人の悲哀



藝人の悲哀

生活にこまつて、婦が淺草で棄てたふたりの子は、公園の玉乗にひろはれたと、新聞にあつた。

私は玉乗の前に立つたとき、六歳と三ツの兒の運命の色を、興行小屋の隅に、覗くと幻のやうに見られた。

この、まぼろしが消えると、舞臺の表口にたち並んでゐた、八人ばかりの男女の玉乗——童子の赤と金襴の姿に瞳がうつた。おもての垂幕は揚つてあつた。



私は一たい、西洋の旅俳優、樂器彈き、旅から旅へ漂泊する辻藝人が好きで、その趣味の爲めに、下らん子供だましの小説でも、常に愛讀してゐる……偶々薄命な藝術の天才がかくれてゐる。

毎年、九段の靖國神社の祭日に、きまつて來る劍舞師の女、その厚く塗りかくした白粉の、少し黒味をもつた顔色に、私の眼には云はれぬ哀愁がたゞよつてよまれる。背せなかに長うたらしめた多い黒髪の無情……劍を舞はす蠻的の演戯に、女が旅を廻る藝人に加はつた動機その哀れの運命が、藝術家から觀れば、一種の快樂で、私は今年も九段の祭日に往つたのだつた。しかし、美しい例の女の影はなかつた、自暴やけに身を壞はす女藝人の果をかなしく思つた。

夏の公園の空氣、あさくさの陽氣で明るい光線が、玉乗の少年少女のうしろ姿を、外から投げつけるやうに照らす、場内うちで何やらの唄の三味線が鳴つてゐる。

玉乗の子は、男女とも、可憐な裝飾に客を呼ぶのだが、十三四歳までが頂上だ、それから越して、桃色肉シヤツを被た裸體すがたも、やゝ骨と肉着がこわくなつて、美を減じ、觀者の愛の眼を引かなくなる。この理を少年少女は知らずはすがない。

さう思つて見ると、二人の玉乗の女の、桃色の猿股腰部のあたりが、少しく見苦しい。外からは殊に、藝人でも妙齡のふつくらと丸々ちいお臀が、出てぶざまの格恰の色消した。顔を看ても、他の少女とはちがつ

て、もう小娘ではない。こゝにも白粉の悲しみがある。

危い、はかない、玉乗の遊戯の男女、わけて娘は年と、もに、世間の愛と觀賞を失ひつゝあるのだ……おのれの臀肉の發育は、玉乗の藝娘としてむしろ害なので、玉の上からの凋落を早くするのだ。

淺草玉乗の娘の臀部に、斯るをかしいやうな哀しみがある。總て藝人の盛りはたまのりでも短かい。

一人の美少年が、突立て口上をいつて居る、以前から見れば、狭く白い額際、丈はだいぶ伸びたが、圓い頬に紅味がとれかけて、もう聲變りが爲かけてゐる。しかし、頭を一部に妨つた、桃色肉シヤツの美少年の姿は愛らしい。

恰ど、騒がしく鳴らしだした玉乗の樂隊に、幻のやうに、空想は壊れて私は追はれるやうに立去つた。

青い藤の棚のした、そこを周つて、雑な木の緑をしてゐる片蔭に、散髪の盲の男が、たよりなげに尺八を吹いて居る。

手垢に汚れた、いかさま見窄らしい尺八笛、けれども、その孔から、聽者の魂を魅する美しい音色が、忍ぶやうに、發散して出てくる……盲人の笛筒をおす唇に燃ゆる力が入り、熱度が増してくるのだ。

全く、内部に古く、くされ盲いた眼、それを舉げてときどき頭を横に動かす。塵のついた散髪の尖が、直射する夏の光線にひかる。

しばらく、慄ひつくほどの聲で、追分の、絞めつけられるやうな、心の切迫した、曲を歌ふ。観音堂にちかい噴水が、銀色に輝いて高う吹きあがつてゐる。

盲人は、垢に瘦こけた、黒い掌で、尺八の底尻をポンと叩いて、更に揃つた齒で、筒口を親しげに嘗めあて、十指が握られた。と、細くて強い、哀愁の海の竅から吹出たやうな、美音が湧く。

灰鼠色の穢れた、水に浸らない單物、骨のたつた背中を、彼は、公園の柵木に靠せてゐる、恰も、茫漠たる外國の廢墟の、燕空とぶ石垣に腰卸す放浪者、いま私は其れを思出した……。盲人の力ある笛は、妄想狂にいた私を、おだて、世界を漂泊せしめる、何でも佛蘭西、和蘭の風景

の笛吹に、酔ふことが出来たのだ。

ふと、覺めると、やはり日本の淺草公園であつた。體格の小さい男女が群集して、死にかゝつた蒼いきたない笛吹が、土面に蹲まつて居る。私は泣きたくなつた。

暑いけれど、白い旺んな夏雲を灼つけて、眞赤な太陽は麗はしい……。其下に、男の尺八は、冷たい同胞の無情を訴へるやうな、呪ふ様な……。音色は艶に美しくしいが、急に悪魔の力でも假りたやうに、悽う私に打聽かれた。

胸すと、ぐるりの青葉が音に感じて、纖維神経がピク／＼動いてゐた。

本郷の、色ガラスの嵌つた、夕暮のビヤホールの土間に、雪のやうな卓布に、獨り眩をかけて、私はウキスキーの勁烈な泡を、熱の唇に舐めて居た。

その時は、東京に初雷のした晩で、空は青う霽上つても、黒ずんだ雲の塊が、あちこちに散ばつて、強い夏の威を見せてゐた。

花の晩春に別れ、甫めて皮膚が蒸れるやうな、雷のあつた初夏の夜、透明な洋盞こつよに黄褐色のウキスキーの味。棚にある虞美人草ひなげしの、毒々しい紅の花葩が、瓦斯の白熱に照らされて、赤う烟るやうだ。

色ガラスが、内の灯で偶に光ると、私は晝間の初雷の、強い電の名残かと疑ふ、酔つて朦朧とした眼に、青と赤の色ガラスが、宛で神秘的な

象徴詩のやうだ。

私が、赤と青との、ガラスの冷色に酔つてゐる時、ふいと白い女の手が、卓の上に載つかつた。

私と女との間に、たゞ沈黙がある。ビフテキの喰餘り、ウキスキーの薫りが發散してゐる。

遽かに、本郷の、湯島の宵の空氣に、美くしい音が生れたと思つた：……しだいに近づいて來て、ビヤホールの入口に止つた。それは男の若い、色眼鏡をした門附であつた。肺臓の内裏に、小鳥が巢くつてゐる様な、藝術の天才的な美しい聲で……。

女は、急に起つて、椅子を離れた。視ると、紫メリンスの帯の間から、

小さな巾着を取出した。そして若い門附に渡した。たしか彼女の指先に銀貨が一個晃つた。

濃い、長う刈つた髪が、眉まで掛る若い門附は、愛想のない目禮——ちよいと頭を下げたまんま、町側を月琴鳴らしながら行つて仕舞ふ。

女は、椅子に戻つて、復啞のやうに押黙つて居る。滑らかな白い首筋に瓦斯の光線が流がれ入る。卓蔽つくろおほひの白いのが眩しい様に、眸を膝に落しつゝ………。

私は、この奇體な女に、ビフテキとウキスキを侷めた。が、どちらも美くしい半眼に品をして、彼は嫌ひだといふ。

それでは、男？ 歌？ ナンデも皆すかぬと、女は朱い唇をひき締め

て、初めて少し笑ひを見せた。

自分は、女の紫メリンスの帯を、穴のあく程みて『門附に、金を與れたのは、誰たれ人だつたかネ』

驚愕いたやうに、俄かに、女は椅子から飛はなれて『だつて、妾、田舎の家が戀しくてよ……』

臉が稍うるんで、女は石像のやうに、瓦斯の土間に立すくんで居た。

あゝ、苦い漂泊の味をなめた、都會のビーヤホルの若い女よ！

自分に、故郷もない、家もない……強烈なウキスキの盃の中に、擲入れた天地ほど、淋しい悲しいものは無いのである。

礫川^{こいしかは}白山の坂の上から、夜分、艶な、哀しい音が、雨垂のやうに流れ  
てくる。それは、新内のながしの男であつた。

星の降おちる様な、夜の空、めうと連れで、男は唄ひ、老女は弾ひて  
ゐる。双つの黒い影は蹲んで、地面にある。

新内は、初夏の、物懐かしく、うら哀しい裡に、甘味のある。夜の情  
調！……ハシャイだ三味線に泪がひつかゝる。

古い手拭で、頬冠をして居るから、聲ばかりで男の顔は見えぬ、これ  
がただ善いので、新内の夜の流しは闇の聲で、ローマンチックの響だ。  
弾者^{ひきて}、唄者^{うたひて}が、どんな美男美女でも、目鼻でもみえれば、音楽の興味情  
趣の半は、スグ覺めて消えてしまふ。あの、東京の街を、新内の連弾さ

の夫婦が、白地の手拭を、頭部に載せる様にかぶつたのは、妙に粹なも  
のである、あれは必つと降る夜露を、防ぐために被るのだらう。腸のた  
ち切れるやうな、迫つた調子の最中に、肌をぬらす露がかゝらば、聲の  
主は、調子が亂れるか、若くは自殺、心中を思立つであらう、吉原の大門  
に救世軍が禁制なら……、宜しく、新内の流しも止めなければならぬ。  
女郎が、三階から何げなく雲でも眺めてゐるひけ過時乙な新内の流しは、  
罪な里心をおこさせる、感情のはげしい、火の如な、新空気を吸つた女  
だつたら、高く身を投げるくらゐは平氣だらう。

植物園の緑の森から、夜の雲に、五位鷺が一羽まよつて行つた。

新内語りの、老夫婦は、いま十人ばかりの人影の、暗い底——地の上

に尻をつける様にして、歌ひ、弾いてゐる。艶な、薄赤いやうな音色が、恰ど墨肌の地から、あたりへ湧いて出るやうである、私は、空腹者ひたりのものの様に、音色と情調を、飽くまでも吸ひこくした。夏の夜のうれしい気分は、闇と漂よつてゐた。

宿に歸つて、夜具の中で、新内の調子をくりかへしそして、涙の出るほどほゝゑむだ。

泥 船

隅田川、油のやうに流れる春の水に鷗が化粧してゐる。

電車を兩國橋の袂で降りて、穿すはめた蛇目傘を提げると、雫が柄からぼとり／＼と落ちる。下駄の齒に雪の小塊がまだ悪女のヤケの執念のやうに挟まつて居る。

春曇りの晝前の空はぼんやりと薄赤い、酒にでも酔つて居るやうだ。

……太陽が漸といま現はれたのだ。

風がなく、静かな曇日、降餘つた粉雪の名残がチラ／＼淡い白粉の様に、些し温まつた地面に隕ちて直ぐ解ける。

丁度雪の塊に薄鼠を刷いたやうな鷗が一羽、一本の突上ツた棒杙ぼうぎに留つてゐる。——其下には無論、満々たる隅田の水が南へ／＼と海へ流れてゐる。

鷗は何かしら考へてゐる様で何もかんがへて居ない。

都會の人は多く知らぬのであらうが、此の鷗といふ鳥は甚だ伶俐な鳥だ。平常は風が吹かうが、波が立たうが、恰も知らぬ顔で暢氣に浮いて居るが、時としては、奴さん破天荒な事をやる。——それは餌の無い折とか、又は他に兵糧が大に在ると認ると、處女の姿は猛然と大車輪の働きをやる。

私は旅に北國の空で、この鷗の一群が、濛々たる満天の雪に混交つて笠の無數舞落るがやう、廣濶した泥田の面へ下るのを觀た。……彼方に海の潮が轟々として鳴つて、水煙がときをり散つて擧るのが望まれる。

鴉は神代このかた醜惡の地に執着しては居るが、鷗は、海の物か、河

の物か、又陸のものやら、冷血動物一寸の胸にも智慧袋が有つて、自在氣儘に變幻出沒する伶俐い鳥である。現に東京市中潮の來る河筋で、人間を馬鹿にした様に無關係の態度で生活してゐる。新しく掘開いた處となると、直ぐ移住民か、發見者の如やつて來る。(或時河岸端で乞食の子が荐りに小石を投込むで居るを見た、渠は、水中菜葉や魚を捕喰ふ鷗が憎いとて、しやくりく／＼答へた)

まだ、先刻の鷗は棒杵の端から立去らない。自分と岸とが睨ッてを爲てゐる。河上から一錢蒸氣が、空想家！夢想家！ポーポーと盛に汽笛を鳴らし煤煙を浴せ乍ら過ぎる。

一昔、ロセツチや其他多くの詩人美術家等は、天上の佳人を夢想して描



いたが、現在棒杵の端の鳥に思を寄せるさへよくせきだが、或る批評家は之れをもまだ地面へ引下げたがる。

併し、ロマンチックは未だ杵の頂から飛去らうと爲ない。

急に、どんよりした赤い曇日は、復た雲の中に呑まれた。粉雪が後からポロ／＼涙のやうに落ちて來た。所詮けふ一日は雪の日であつた。荷船がまた帆を卸した、赤い顔の男が日に欺されたやう空を仰ぐ。

隅田川、河波は俄に高くなつた。(自分の神経の昂ぶつたせいにも由らう)、薄濁る波上のかなた、此方に、突然にピヨ／＼と白い物體が現はれた。南北いつ來たとも知れぬ無論鷗だ、此奴太だ高慢チキな鳥で、水に白頭を没したり、その羽根の一枚をも濡らすまいと御洒落か用心し

てゐる。無心な様で其の實神経鋭敏で、水に居て、絶えず空に附く思、陸をも忘れぬ形が見える。この鳥にも亦哲學者風、詩人肌がある、矢張り水は故郷であり、墓であつて、果は時代の波にさらはれるのも、詩人哲人と運命が相似てゐる。

併し、始めいつ何處で生れ、終りいつ何處で死ぬるをも識らぬ態度は鷗は萬有を超越してをるともみえる。

いま、電車か偵に追はれたのか、一匹の小犬が、降る雪の中から飛出して來た。赤い小さい舌が火のやうに燃えてゐる。

不幸なる狗よ！人家に飼はれ、滑稽な名まで喰付けられてから其自由を失つた。汝の祖先が山から市に出て以來その本性が柔らぎ馴れた。――

狼はさすが同族の王様だ、瘦せても枯れても深山の中に死ぬる時は黙つて、威張つて死ぬる。

犬を視た目で、鳥をみると、落着いた鷗の振舞が心憎い。波の上からフヒ／＼面を出して自分も何だか愚弄されてる様だ。

露西亞のゴルキ―は思切つて善く浮浪漢を描くが、夫の悲惨な漂浪者が、露國を流れるヴォル河や其他の大河の畔で、殊に日没後杯、大鴨や鵬ほうのやうな巨禽が眠る様安穩に浮ぶのを見入つた時、その家無く饑ゑて疲れた眼、薄い服に震へながら如何な氣持が爲れるだらう？ と今更、菜賣であらう襤褸を着た男が影のやうに、草履で河端をトボ／＼と歩いて兩國橋を渡つて往つた。一介の菜賣は、天地を宿とも巢とも爲る、浩

浩の鷗の姿を眺める筈もないが、兩國橋の鐵の桁から不意に四五寸蓬の頭髮を突出して、そして水面を見卸しつゝ、何か考へ／＼行つて仕舞つた。

春二月の書前、今に午砲が鳴るに間も近い。空は愈よ本當に暗く曇つた、雪雲の上に雨氣を含むで直ぐにも冷たいのが落ちさうな――。

大は灰色の曇天と、小は河上鼠色の鷗とのコントラストが暫く妙だ。濱町、匂ひ艶に降る雪に擴げた紺紫の雨傘一本……銀杏返しの色白の若い女が身體を憚るやうに斜に北へ……、此れは黒髪長いぬばたまの夜は深い情海の、遣る瀬も、浮ぶ瀬もない乙な鷗であらう。ゴルキ―の作中にも斯んな女主人公は居るが、モット活潑で大膽だ。平氣で男の頬を

も撲つが、時に氷の冷酷に、時に夕立のやう熱い泪を降注ける。

春寒い、隅田川の河岸端の、私は茫然と何分か佇立んで居たらう？ふと氣が付いて前方を見やると、水に突出た棒杙の鷗はいつの間にか居なくなつた……。

先刻からの雪と、何だか馬鹿々々しさが身に沁むで、吹く河風を甚く感じながら、意氣な二階造り濱町河岸の角を曲つて六七町、折れて明治座の前迄來ると。思出したやうに瞎くらと太陽は照だして、雪氣に濕つた大繪看板が明るい。

今年の秋、私は所用あつて此附邊を通行つた時分——蠣殻町の河岸端水面を離れて丁ど五六尺の處に、新しい投網が末擴りの三角形に天目に干晒してあつたのを見た。

其の瞬間から、何でも、世界と現實とが、悉皆な網裏に捕はれた様に感せられた。——誰れもの着物の縞が細かい種々の網の目になる、紅い女の花の帯の模様までが然ら視えた。尤も私は此時分激い神經衰弱に罹つて居つた。

仰ぐと黒雲白雲が網の形狀に今にも落ちて蔽ひ被さるか、俯すと地上の捨繩や、藁條や、箒の痕までが、奇體に網の目の如うで、夫の深刻なる網の暗い印象が、怎うしても一週間は私の網膜からは離れなかつた。

——此間自分は蒼くなつて死んだ魚よりも悲しい思を爲て居た。  
今歳の春も、一年越しやはり腦が惡い。僥倖にも、今日は例の網が

干してないのが未だしも心強く、芝居前、右方の板橋を渡つた。一人の男が長い竹竿で泥船を漕いで居る。木の欄干に何氣なく私は下の方を見た。その刹那、折も折、恐ろしい大きな黒い眼がこちらの方をギロリと瞻上げた。

視線の發矢と合ふと私は一縮に戰慄した。——泥の底から、社會をグイと睨むだ、呪咀と、憎惡との、凄い、鋭い、眼の怪光から、自分の心魂は微塵に破壊されて、……全く殺されて了つた。

## 久世山の夏草

大なる東京市に、城南に品川の煙波を、ながめらる芝愛宕山に對して北の小石川に牛込は早稲田一圓の緑を見はらす久世山の高臺がある。東京市到る所高臺は、建物でギツチリ押詰つた様になつたのに、獨り久世山だけは手入をせぬ野育ちの樹木と、青草が廣地を蔽被おほひかぶすやうに蔓つて居るのがうれしい。

京橋、日本橋、神田等の繁華な大通を、近代てふ巨腕きよわんが赤や白のペンキを塗廻し行く様に、北の小石川の端をも餘さじとマッチ箱的の小家が、日にく新築される。それにも係らず、牛込の街と膝付き合せて、この青草の久世山が残されて居るとは、殆んど不思議な位のものである。

古いも、新しいも、久世山には一軒の家も建つてゐない、一脚のメン

チもない一面に生へ擴つた草ばかりで、大小の樹が疎らに崖のやうな端に茂つてゐる。茲には干涉すきな、迫害の人間の手が些も及んでゐぬので、一本の微草さへも、自然のまゝの生を樂むで見える。

日比谷、九段、上野の諸公園とちがつて、久世山は、側に高い建築物がないから、愈よ位地は獨占的で、雑草の葉の光が、野生主義を思ふさま發揮してゐるのは、東京に一個處こんな高臺が島のやうに在るのも、今日では太だ珍らしう。

越中島、佃田、月島に葭葦よしあしが枯れて埋立地に家が建詰つたよりも、小石川久世山に草の残つてゐるのが不思議である。

他のにぎやかな下町、山の手の瓦屋根の上では、氣のせい何か何だか空に壓迫される様だ、久世山の空は、全くおッ開いて、見擧げると、瞳がくるめかしく、深い蒼い底に溶けてしまひさうで、此處でなければ、別の公園の高見でも、空に邇く人間離れをする氣持とはならぬ。即ち現代文化の具備そなはり過ぎた刺戟が、人間の官能を囚へて放たぬから、思切り心を大空に放散することは出来ない。この意味で所謂公園の散歩は、却つて近代人の脳神経を疲勞らす種を醸す、由て漸次にドコの公園も淺草公園と擇ぶ所がなくなるのだ。

久世山は夏草の時に、最もその特色が烈しく著はされる。直射する燒ける太陽は緑を赤ら染める程でも、風が荒つぱく吹くからバカに涼しい。太陽の熱と、草いきれの緑と、吹く風の交錯して高臺の上にな、かふ圖

は、廣い東京にも復と見られない。山の上町の童子が、音羽や牛込の裏長屋の子供と原に遊んでゐる。

空に湧き漂ふ白雲や、西の茜色あかねいろの夕焼雲をながめるにも、東京市でここが一等である。向ふの方に雲を纏うて浪の壁ひたの出来た秩父の連山や、甲斐の山、殊に天氣の晴れた日には、大富士がぬつと男性的の磨きぬいた肩肌を現はす。久世山のやさしい草の葉に風がある。

原の西縁、音羽に面した丘の突端に、樺の大木や古木が並んで立つてゐる。同じ緑でも枝振からして蘢荒そくわうで、都會中の公園や庭先の人間の手の附いた有ゆる柔膚じゅうふ婉曲えんきよくな樹木を、瞰下しつゝ嘲るがやうな姿である。恰どクロムウエルが初めて議會に立つて演説を爲る形だ。

丘の上だから、木が頭抜けて極めて高い。空の白雲を甜めて侶伴ともとして繁り葉は夏の風を浴びてザアと鳴つてゐる、また傾斜した坂の低い木の枝葉は、常に塵埃がかゝつて居る様だ、追が礫川水道町、音羽町の砂ぼこりの爲めだが、其れでも上野停車場附近の煤煙蒙りの樹と違ひ、都會の場末といふ木に一種の趣がある。唯時々、こゝ等の腕白に樹の幹皮を裸に剝がれて居る、之れは無殘の所業と謂はねばならぬ。私は一度霜のツク／＼する晨あさ、果して何者が夜の久世山に登つたのか、例の斷崖の大木の幹の根方に、ナイフで以て、深く慨世悲憤の文字が白ら白らと彫まれて有るを觀た。人間に不平を漏らさるゝ木こそ傷々しいが、枯草の上に降積つてゐた霜は、自分の眼には熱い血涙のやうな紅んであつた。

眞夏の炎天に、學生や、行商の様な男や、風變りな人間等が、久世山の青草に來つて、この葉を高く蔽おほひひるげた巨樹の蔭に、憇んでは涼風を懐に入れてゐる。燉やくる暑熱を怖れぬ少年の白い學生帽が青草と調和して、都會に田園の風景は濃厚な油畫に似てゐる。蝶々が強い光線にひかり漂つて飛ぶ。隅田川邊の少年は情景が水彩畫的であらうか。

莊嚴で雄大な雲の峯、むくくと打重なり底光りのした大なる物が、天に五ツ六ツ神怪に聳えて浮いてゐる。其色は純銀のやうに美しいが久世山の青草の中から見るとは、街中の黒瓦の上に仰ぐのと異つて、暑い感じよりも紫の深海に怒濤のやうで寧ろ涼しい。私は東京の市内に一個處、雲の大銀峯を放棄に眺めらるゝ場所を残されるのは、非常に面白いこと

思ふ。昔の緑の武藏野が五十年経たぬうちに、瓦と壁と材木に埋了られて、僅に小石川の端に久世山の草の一角のみ餘されて居るとは、江戸の老人でなくも宛ら夢のやうである。併しこの夢も甚だ短く、懐かしい久世山も今に普通の町の名と變り、女子供からも其れを呼ばれるだらう文明風歐式の公園も結構だが、昔し豁達くわつたつで氣の荒かつた江戸人の住んだ武藏野、いや今も血の少し黒く野生的な江戸子の呼吸する東京に、斯る草ばかりの青々した天然の丘は、態と東洋的の南畫趣味の風雅から謂つても、是非都會のはづれに保存する必要がある。

八月の午後、一時緋の如な炎天の下に、かの大木は腋から嵐を生むかとばかり、盛んに吹く風は涼しいから、小石川牛込の附近を通る人達に

冷やかな片蔭と、流れる汗を消^{けし}歛^める氷のやうな空気をめぐむ。三四筋も黒く細道のついてゐる、爪先上りの緑の高い坂のうへに、白地のハンケチや扇子の動いて見えるのは、一種明治の夏の日の風俗畫である。日比谷公園のベンチよりも此方に東洋風の面影が残つてゐる。

品川や大森の別荘やすゞしい海岸と同じく、小石川の久世山の丘は、學生や店員や、小僧労働者にとつて、綠蔭は實に夏の天國なのである。一面に野生の草の風は、眞に汗する人には紫の品川の海波よりかも勝る位であらう。日中蝶や蜻蛉を追ふ子供、この原の爲に家で母親は霎^{しば}時の晝寐の夢を優しい眩に。

私は詩のやうなローマンチックを、暑い盛りに見た事がある、それは一人の漂浪の旅音楽師が例の大木の蔭に眠つて居た。私は遠くの方で知つて草を柔かにツツと踏んで、彼男の側に近寄つた。若い小皺のある日に焼けて疲れた顔色、方々を被て歩いた編笠が青草の上に打棄て、在つた。

垢染みた腰に尺八を挿した儘、男は木の根方に靠^{もた}れて睡^{ねむ}つてゐる、片手に胸の所に月琴を抱いてたが、何處からともなく吹く烈しい夏の風に感覺的に月琴の織い糸が鳴るのであつた。錢のいらぬ柔かい淨い草の布團、葉の緑の濃い影がローマンチックの綠色に音楽師の全體を染めてゐた。

また私は、久世山の原で書物を音讀する學生、片側の傾斜した草地に



横になつて、物思ふ様な詩人哲學者じみた若者を度々視た、日比谷公園の白日の緑蔭に頭髮を艶々光らした洋服の青年と異ふ。學校の教室や、騒がしい下宿屋から追れて、獨り静かな天地の中に冥想する丘であつた。此等の學生にも如何なに久世山が有益で、恰もラスキンの神壇の如きもので在つたらう、日夕紛擾な雑音のうるさい都會には、ウァーゾオースの詩振を實地にやるでなくとも、天下の考深いまじめな青年學生のために、寂寥しい神秘的な原なのである。他の公園は四季共に脂粉の香を、樹間に道路の土に又たベンチの上に漂はせてるが、久世山には赤い洋傘も草の上に舞はぬ静けさ、男性的自由の薫りは満ち溢れて、立つても伏すも眼には茫漠たる白雲と草だ。私は演説の稽古を爲てゐた學生を見た、

この學生の眼には原に來た悦びと、浮華な都會の空氣に反抗する鋭い輝きがあつた。

久世山の周圍、丘の下は水道町と、灰色の音羽町だ。それで東京の賑ふ繁昌の諸方から追立てられ、自身また虚榮の空氣を厭うて此等の街に來た物か、無職業、學者、哲學者とも、勞働人ともつかぬ一種の浮浪漢が、偶には久世山の草原に息んで居る事がある。乞食とは見られぬ顔貌に犯し難い氣品があつて、恰もゴリキ小説中の理窟屋の主人公、世にすねた漂浪者を思出させる。徳川時代の榮華を礪川の草原にしのお白髯の老翁、こゝに來る變り物は多く三十以上の中年者である。何等の世情世間に係はらぬ様な、冷やかな眼をして、ほめく灼けき夏草の上に坐

つて居る。彼等の身薄い影は、たぶん礪川久世山を夏日の最後として、都會を離れて何處ともなく立去るのであらう。薄赤らみえる夕陽は名残のかげを淋しく草に零す。

牛込方面の並んだ屋根瓦、戸塚の杜に早稲田、目白臺の木立の翠を眺渡されるけれど、久世山は其自らの場處としては、草と疎らな樹のみの寧ろ殺風景な位だから、此處に畫架を据ゑる美術生はみぬが、折には髪の毛の伸びた神経質風な若い文學者に會ふ、イブセンは扱措いてトルストイや露西亞の文藝を愛好む青年文士が來さうだ。

高臺の向ふには、手にとる様に早稲田大學の地と相對してゐる。近代文藝の紹介者、新しい作家批評家は、赤門よりでなく、多く早稲田の講堂

から出たが、この荒い寂しい久世山と何等かの因縁が無いでもあるまい。此の丘から、牛込一帯、早稲田田圃へかけて家根の煙出し、街の庭や明地に植はる樹木が見られる。洋館が日本風の家々にヒョククリと建交する不調和が、高い久世山からは殊に一目に爲れる。いや現在の此の詩的な草の丘をも、大なる或る手は、小狭しい建物に詰代ようとして、もう押迫りつゝあるのである。

側く江戸川の岸に電車の軋る音響、小西洋料理の軒看板、小料理店の酒旗とまじつて、牛込の端から西の小石川に迄、櫻肉てふ美名の馬肉屋さへも出來て、一種の奇妙な重苦しい空氣が漂ひ流れてゐる。

江戸川の上、ドン／＼の落瀧と水車に近い、關口水道町から、一丁目

まで音羽の街は汚い紙漉家のある丈け、古い建物と裏長屋のある貧乏町なのだ。未だ宿場の街の面影が残されてある。

草の崖の下に、車のゴロ／＼と過る音と、豆腐賣のラツパの聲がかしく聞える、音羽の暗いやうな町が燦爛たる何かに強く憧憬あこがれて居る。

久世山から石榴色の夏の燃える美しい夕焼雲をながめて、しばらく現代の何物をも忘れ果てやう。

## 二階の下

雪の夜の十二時……。

東京或街の或樓で、私は孤座して兀々酒杯を嚙つて居つた。

觸らば指に冷いわが頭髮の上に、華やかに落す電燈の光線に、三度四度、艶な姿を現はし、女中は銚子を白い手に運んだ二階六疊の間。今ま軍鶏が鍋に煮えてゐる蒸煙に、女の香ひが芬として残つてゐる。新しい疊の上には白粉が零れてるやうだ。

隣り座敷には藝妓が揚つてる様子、撥の音が冴えて、喋舌ると白い齒が眞珠の碎けるやうな音をさせる。

屋外そとは雪は最う歇んだらしい。私は飲んでも呑むでも、酒の酔は發しない、『こんなことなら雪の塊を含むだ方がましだ！』と獨言して、ツト唇を血に咬んで考へ込んで居つた。顔は大方蒼かつたらう。

すると、カチン、カチンと時ならぬ拍子木の音が裏二階の下で起つた。寸と積つた雪地に快う響くかと思ふと、續いて、俳優の聲色が始まつた。頗る美しい聲………。

私は、醉眼を固くく瞳を落失せよと許り閉して、聞耳を欬てると、芝居の場は「丸橋忠彌御濠端」の所だ。自分は感極つて涙が滴々と膝の上に乗れた。

春の一月の雪の夜更、東京磨いたやうな料理店の二階の一室、快漢丸橋忠彌の御濠端を獨り痛飲中に聽く。此の光景、何等の詩的ぞ！情趣！！詩情は酒盃さかづきの中に波々と溢れる斗りだ。今や日本間で、明煌あかしが電燈でなく蠟燭の火がポーツポと燃えてゐたなら、尙一層此場を時代的にして面白からう。で、私は美聲に恍惚れとして何時しか、酒盃を右手に固く握つてゐた。

私は小兒の時から演劇は大の嗜好で、錢勘定しながら繪看板の下に佇立んだ事は度々、殊に「丸橋忠彌」慶安太平記の一節と來ては、先代の左團次の頃から一回も缺さずに覗いたものだ。明治座の叩けば氷か鐵の如うに心地よい音が出る板の上に、名優左團次が扮した忠彌が活躍したのは忘られない、詩と勇氣と士魂さむらひたましひの凝塊かたまりが劍光裏にムクムクと動いたのは目の前に浮ぶ。自分は忠彌の詩的人物が甚太はなはだ氣に入つた、壯烈悲劇的性格を大に愛する、下郎姿に身を窶し爛額らんがく礫いしを拾つて江戸城濠の深淺を測る。酒を被つて氣焰を吐く男振！彼れの一生は詩中の物だ、由井正雪

に擔がれた、好人物丈け義氣と熱情に富んでゐた。其の當時は憎むべき叛謀人で在つたらうが、血のある者誰れか徳川氏の專横跋扈に不平の念を抱かなかつたか？お茶の水で槍の先生であつた彼れ、其の光芒銳利な槍の穂尖が筆の穂に代へても立派な働きを爲るは忠彌だ。夫の行動は多血多感、不羈熱狂の詩人である。

今まチヨン／＼チヨン！ 拍子木の音は、私の空想と幕をも落した。で、盃を置いて起舉つた、何となく其の聲色遣ひの男が見たいのだ。

二階の障子をサツト啓けて椽側に出ると、そこは狭い通道で、假聲使ひの漢子が、月下雪明りに悄然と佇んでゐる。

『旦那、御面倒さまで……』語尾は此種藝人の變挺な調子で、其れが消えて了つて解らぬが、何でも分けた散髪の頭を荐りとペコ／＼低げてゐる。

私は、二階の手欄を両手に攔まへて下を視ると、雪を薄う敷詰めた小路の真中に立つて居る男、年齢は大方四十近いだらう、着物は但黒い影と許りで無論縞地扱は明らないが、二重三重に捲きつけた首卷のみがクツキリと夜目にも白い、咽喉が資本の稼業だから大切に爲るのか之れはモスリンか稍上等らしい。如何にも氣の毒な程細い瘦せた、而してさもしい男だ。此れが先刻、勇壯痛激な彼の丸橋忠彌の聲色を遣つた男とは信じられぬ位で、二階の方を瞻上げた顔は雪の光で蒼白う、額に垂れ掛かつた長い髪が夫れを凄う見せ、私の神経の作用か何だか憫れみを乞ふ

彼れの眼には泪の露を持つてゐるやうで……。

『旦那、お邪魔さまで！』

右の手に拍子木をカチンと一つ打つたが、後はカチチ……と微かに弱い音が顫へた、恐らく寒と絶望とで両手が震へたのらしい。

『旦那、別のを使聲りませう?!』

私は白紙を引裂いて、小さい銀貨を包んで二階から投た。御濠へ小石を擲込んだ零落したる忠彌へ。

『旦那、有難うさまで……』

渠は態と聲高う二三度繰返して二階を見上げた。多分隣座敷や其又隣の客に聞えよがしに言つたのだらう。併し、其處等からは、何等の効果

も無い、障子さへも開く様子もないのだ。時刻はもう遅いので三味線の音は止んだが、男女の笑ひ私語く聲が、思出したやうに盛に洩れる。

客は確かに五六組はあるらしい、彼等は此の賤しい聲色遣ひの聲を聴かなかつたか、否、屹度、時に取つては肴に聞たであらうが、一人として之れに相當の報酬を拂ふ者はない。藝妓に涎を流して笑ひ崩れ、此男の藝に就ては善悪さへ一言の評もせない。空徳利を持って折から廊下を通つた女中が、軒端へ唾を吐き掛けた。

未だ雪を生むらしい空には、少し疎らに春星が珠玉のやうに晃る。假聲使ひは、雪の地面に伏目に爲つて立つて居る。

『君の聲色は全く巧妙いよ、丸橋忠彌と來ちやア十八番だらう、耐らん

ねエ……』

自分は、手欄に倚懸ッて斯う話しかけた。

『何有^な旦那、怎う致しまして、貴君！』

渠は突然驚いた風に、面を二階の方へ向けて舉げた。思設けなかつた賞讃に、稍々得意らしく微笑が月影に讀まれる。

『君、僕は忠彌が大好きなのだよ。あゝ爲た男は皆面白いさ！僕の愛きな男は昔から悪七兵衛景清、中山安兵衛に忠彌サ、國定忠次杯も面白……怎うだネ君！』

『旦那、全くですネ！貴方は芝居がお嗜きらしいですな』

『左様だよ、俠客物と來た日にや、溜らないね』

私は幼少い時から稗史小説が好きで、殊に仇討や武勇傳や俠客の達引や水滸傳の類は、夙くから貸本屋の味を知つて、親から貰つた小使錢の多分は之れに投じた程耽讀した。其の長脇差を理想として居た可笑味も有つたが、現今でも時々悲凄沈痛な浪花節の寄席を俛^くる、義士傳の中山安兵衛は最も愛きな讀物で、早稲田に居た時分、態々學校の嫌な課目を打遣つて高田の馬場へ出駈けて、叔父の仇十八番斬を一月に行つた安兵衛の豪雄を岡の草に喚んだこともあつた。早稲田の酒屋には其時安兵衛が引かけて往つた一升樽が未だに在る筈。

で、聲色屋の彼れには、自分が甚だ妙な人間と思はれた様子。

『エー、失禮ですが、旦那は何の御商賣で居被ッしやいます？』

『ハ、ア、君と同じ様な商賣サ……』  
『で冗談を、貴方!』

私は可笑しさを奥歯で噛み殺したが、實際心の中では眞面目に考へたので。

此の聲色遣ひの男と、自分とは果して何れ丈けの相違があるか口と筆との差異ひで、自分は十年餘りも天下に絶叫披瀝しては居るが、何等世道人心を裨益した驗はあるか。己れが斬新であると念ふ奇想も、他人の眼からは一向に陳腐平凡であつたかも知れぬ、古人の説粕であつたかも知れぬ、吁、生活の爲の原稿賣も随分疲憊つかれもするが、大道に聲色遣ふ男と敢て奈何程の懸隔はあらう?! 彼男には慥かに假聲の天才は有る。

『君の商賣は、大きに面白いだらう、行くにも歸るにも自由に氣樂だらうな』

『何有旦那、樂が尠なく、苦みが夥い稼業ですよ。此節のやうな不景氣と來ては、柄駄目でさア……』

『君! 僕を弟子に爲て呉れんかネ』

『旦那、御戲言を?』

『全く眞正だよ』

彼れは私を酔つてると懷つてゐる。

『貴方は、何か能ますか一つ』

『酔拂ひの聲色なら出来るネ』



『夫れでは上等です、結構です』

『然うかな』

『大丈夫です、一番お行きなさい』

『君の宿は那處だ？』

『ハイ、新宿の側です』

『家へ之れから一緒に往かうか』

『ハイ、入ッしやい』

『商賣に連れて行つて、途中で役に立たぬと云つて振棄てや爲ないか？』

『其んな事は決してありません、旦那』

二階の上と下とで、最う物の三十分も立談しを仕たらう。顔を霎時見

せなんだ先刻の女中が、私の横手の所に睡さうな目付で惺然と立ッてゐる。「もう夙くに炭火も落したし、遅いから歸店かへつて呉る」と言はぬ許りとは顔色で讀める。

『君、何稼業も世の中は同じ事だ。まア氣樂に面白う世間を渡るサ、君等は陽氣な商賣、女もあり、酒もありさ……ネ』

『旦那、お寝みなさい。ドウモ有難うございました、最う何處へも廻らずと宿へ還へります。サヨナラ……』

大切の拍子木を懷中へ入れたと同時に、メリンスの白い首巻を捲き直して、曉方近い風に胴顛どうぶるひしながら、會釋して其の散髪頭を下げて彼は、雪の裏路を狐鼠々と往ッて仕舞つた。月明りに黒い影は長う曳いて、

道を曲るまで私は二階に立つて、シッと姿を見送つた。

怎の座敷も森閑として火は消え、客は最早一人も居ない。私は勘定を済せて、料理屋の門を潜ると犬が寥々雪の天地に吠えてゐる、あゝ何處の忠彌に吠えてゐることやら……。

## 絶望

神田某支那料理の店前で、ホーカイ節の女が二人、一人が月琴で、他は赤い襦袢を脱いだ肩からスツポリと露出して踊つて居る。

白く塗つたペンキに朱で以て支那料理と表はした大看板の下の處だ。支那人のコックだらう店頭の次の間の柱の所から頬邊を半分出して覗いてゐる。

茲處は日本人の經營してゐるのだらう、彼れ支那人の料理人は大方備はれてゐるのらしい、本國で熟練た腕の味を見せると謂ふのだ。

柱に喰着いた偕も黯い銅色の顔！三四尺も下の方に、例の辮髪の端が鼠の尻尾の如うに少し出てゐる。履沓の片足が世を憚るやうに頭斗り見えて。

世界に稼ぎ好き、労働嗜きの支那人は、多分本國を去つてから漂浪に漂浪を重ねたのだらう！年齢は三十を超して日本の女殊にホーカイ節の妖艶な意氣の扮姿に恍惚れて居るらしい。支那本國では、藝妓でも女俳優でも一般藝人は、千金を擲たねば之を掌中の物とするには難いさうな。無論勞役者には及びも付かぬ話だ。

悲調低節を聴馴れた彼れの耳朶に、此は陽氣な流暢な法界節の歌謡は、甚麼に快く響くのであらう？何時しか汚い履沓が土間の板でコト／＼と拍子を取り初めたので、如何に斯の支那人の浮かれて居るか解かる。頓て面の全體が現はれた、小皺の波が幾筋も寄つてゐる額に、モサ／＼した髪の毛が汗にビタリと貼着いて、尖つた口から白い齒が笑ひ氣味に見られる。

先月、日本橋の青物市場の所で、支那人の菓子賣が大勢の衆に冷評かされて居た。彼れの手を持つ提げ籠に何れ程の油菓子が容れて有つたらう？一人の悪太郎は道路の小石を拾つて其中へ投込んだ。で、支那人は噓を吐いたかは知らぬが『私、菓子碎けた！』彼れは四十男が殆ど泣か

ん許りの顔をしたが、更に復た冷罵の雨を春の晴天に浴せられた。

私は、神田では善く支那人の労働者に出會うが、平常も一種の悲惨痛酷の情を催す、あの服裝が頗る世界を跨にする漂泊者たるを證はす、灰の中から搔分けて又灰の裡へ沈往く世紀末の人を憫んだ。

此間、滿洲から歸朝つた友人と、恰も雪の降頻つた夜短檠を剪つて語つた折、渠れは熱頬に涙を瀝いで言つたのは滿洲の苦力の譚。

苦力は即ち支那人の労働者で、滿洲の野にも市にも夫の影姿を見ない事はない、彼等は牛馬にも劣つた下等な人間の群で、常にゴロ／＼野獸的生活を行つてゐる。日本の人夫が一日四十八錢許で暮すものなら、苦力は只の十二錢程で饑を凌ぐ、臥るにも人家の軒下位で、彼等は女房を

莫大なる黄金で以て買ふ爲めに、一つは姑に盆暮に贈物するため、骨身も摧くる労働を仕るのだ。一杯の極安値な高粱酒ラチチュも容易には口にせな  
50

哀れ、風寒く濁水地獄の深淵ふちを湛ふるあの満洲遼河の畔、苦力は材木を運搬び、牛馬を逐ひ、大豆の荷揚げを爲る杯、稼ぎに稼ぎ、働きに働くが、時には大金を懐中に蓄積ためてるを悪者に嗅付けられるが最後、首を手もなく絞められて、直に遼河の真中にドブンと投込まれ泡沫諸共に法律もなく消えて了ふの儚い運命!!!

私は今ま、此の支那料理屋の彼男が、何だか苦力に似てゐる様な氣持がした。渠の相貌が奈何にも寫眞で見た苦力的であるのだ。

ホーカイ節の女二人は、唄歌も踊舞も報酬だけは濟して、サツサ、さのさ、と月琴を春の晝に細く鳴らしながら、次の町へ雪駄は往つてしまつた……。

支那人は、耐りかねた風に、柱の蔭から躍出た而して啼泣ていきうせん許り彼れが面上には、世界中の悲痛と絶望とが青い筋と成つて現はれた。

### 東京の女と柳

加賀百萬石の女俳人、千代女によつて、柳の美はすでに昔に謳はれたが、明治、しかも近代の女性の眼は、どんなに此の柳の姿を觀察するか

自分は殊に東京の街頭に於て若き婦人の通るときに、折から青柳のみどりと對照して、兩々の優しさと、優美に感じ到るのである。

詩人ハーン事小泉八雲は、態と我日本の婦人を娶るまで、我國の人情風俗に心酔し、あらゆるローマンチックの匂ひ、神祕的、はては玄奇なる怪談にまで、其の靈筆彩管を染め、以て廣く世界に紹介した。蝶や、露の美文は有名なもので、慥かに東京の街の柳も、彼が詩眼に深く刻まれるやうに、鮮かに映つた。

自分の趣味から云ふと、春から夏にかけての植物で、この柳ほど愛きな樹はない。櫻も赤い椿も好ましいが、別けて緑の色の濃くて、樹體枝柄のしなやかで、そして強い所のある柳は、一種の女性美を聯想して、

心底から大におもしろく、且つ詩的に感ずるのである。

燕が來、春に黄な芽が萌え、十五六の娘のやうに、色を染める頃の柳は、こゝに釋かぬ、自分は東京の夏の街頭において、些か觀た柳の美を説きたいと思ふ。

一たい、東洋の風俗が、特に著しく現はされる節季は、この夏の時分である。華やかに濃厚なる色調の四月の春もさうだが、初夏新緑の頃から南方的温帶國の我が日本の風習が、何物にも心地がよい程、瀟洒に且つ熱烈に、そして大膽に現はれるのである。

時候から言つても、我が東洋で初夏新緑の折が第一に佳い、暖からず寒からず、空の色も春から見ると、蒼味の色も深くさだまつて、何處と

なくしつくりした色である。で、この空の下に、例の柳の垂れた流枝と細かく梳つた形のよい葉が、朝と夕暮の夏の風にそよぐ。季が初夏も過ぎ、六月に入り七月となると、倍々やなぎの緑の色が、すこしは黒味をもつが、濃く魔氣妖氣さへ加はつて、東京の意気な都會の街には、道路四ツ辻に、色彩と情調を添えるのである。かの新しい柄のセルを着た婦人が、柳と少し間を置いて通る姿は、飽くまで男の眼を刺戟し、夏の温かい空氣に魅せねば止まぬ。……柳のこんもり繁つた葉蔭から生れる柔かい風。肌觸りの感覺のよいセルを纏ふた袖口から、人間の官能を刺戟して漂つてくる懐かしい匂ひ、これは詩である、畫である。いな明治の新らしい浮世繪、濃厚な風俗畫である。近代であるだけ、歌麿よりも

強い所のある、新らしい描寫法で、繊細で妖艶な彩筆を振つたものだらう。

夏において、柳は特に東京の街と調和をする。關東のすがすがしい空氣、それにもまれて陌頭に立つ柳樹の姿は、洒落として意氣で、ことに江戸子の男女が、見返つていく粹な形と色を持つてゐる。追々俗化されて江戸趣味が減びていく、今日の東京には、是非赤や紫のペンキ塗と交錯して、清新な柳の木を盛んに植ゑねばならぬ。西歐のアカシヤの緑の濃い並木道に劣らぬ、柳の木蔭をあちらこちらに多く拵へるが宜い。この樹本の姿體は、激烈なる都會生活から、疲れたる人間の感情を柔らげ、知らずに女性のやうに慰藉を爲る、柳がなくなれば都會は惡どい化粧をした

様で、サツパリした美観はたもたれない、乃ち空氣がきれいに成らぬのである。

之れからの女性は、其の美は無論だが、優軟婉曲なるうちに、此の柳の底から根強くなくてはならぬ。男子の松にも劣らぬ守操と、情調が鮮明に露はされねば、活き／＼した新らしい、進んだ婦人の資格はないのである。『意地にや負けまい吹け／＼嵐、松は男の立姿』と云ふ俗歌がある、之れに對して、優しく見えても、烈風にも容易に折れぬ、勁堅なる情味のある柳の新らしい歌が欲しい。血の暖かて而も水から抜け出たやうな、美しい凜とした東洋的の女性が、實世間に追々見られねばならぬ。

自分は元來、師宣、春章、歌麿などの浮世繪が愛きで、之を見ると、

我が古の優美であつた空氣と情調の中に、惑溺して、眞にロマンチックの豊かな匂ひ、夢の場に酔つたやうな感じがする。で、今日では自分は夏の日、東京の市街で、毎日この明治も四十四年の、女性の活現した目の覺める様な浮世繪を觀てゐるのである。之れから先、清方、英朋、さては焦園松園の女畫家が、どんなに明治の女性を彩筆に美化し、純化するか、自分は大に楽しんで待つてゐる次第である。自分ならば、女のセルの着物、又は派手の模様の浴衣とでも、今日の浮世繪には是非、背景として街の柳を添描さしたく思ふ。

上方大阪の橋、新町の橋の畔に立つと、どうも濃艶な油氣たつぷりな近松の院本を思出す。西京の三條四條に架せるあの清い加茂川の橋では

藝舞子の情調を、我が大都會の東京では、柳が到る處普通の街にも植つて、その翠緑みどりの潔よい色を誇つてゐる。やさしいが、烈しい關東の氣候と風とに反抗的の意味もみえて、如何にも瀟洒として淡泊な江戸風を、遺憾なく柳は發揮してゐる。

西洋人は、東洋の風俗殊に我が日本のローマンチックの匂ひ、夢幻の影のやうな色彩ある習慣を喜ぶ。小泉八雲は固より、英吉利のアーノルド、佛國の文豪ロチ、其他が我が日本に渡つて來て、多くの繪畫器物の藝術品と同じく、特色ある神祕的、またおもしろい風俗の詩的な個所を、大方盜むがやうに採つて、描いて世界に紹介を爲た、小泉八雲は日本に來なければあれ丈の傑作は得なかつたかも知れぬ。

之れから、眞の夏季に入つて、男女とも、素肌に白地のサツパリした浴衣、透綾の輕羅を引掛けると謂ふ、東洋獨特の、心地の好い氣節とはなつた。圓い團扇片手に、涼しい風が吹く街頭に佇立む頃となつた。女の單衣姿はますますやさしく美しく情味の氣分を加へる、東京の夏の柳の色もますます濃くなる。

目のさめる様な、東京の女の中形の浴衣と、夏の夕風に梳る濃い柳の色と、正に恍々する明治の新浮世繪であるまいか。

## 美人像



庭前の菊花の頸、秋雨に打たれて惱める憐れさ！

壁間掲げあるは、匂ふ西の名花、女刺客シャロット、コルデーの美しい肖像である。

秋の哀れは畫にしみじみと、石牢の裡の顔が青白う悲しく見える。

吁、コルデー、鷲ペンを持つて居る右手は、佛國三日天下の兇漢マラーを短劍に刺した手か。薄紅櫻色の頬を冷たい鐵格子にあて、死刑前に何を懐へる。長さ雲髪に被る白き獄帽白の牢服の崇高さ、昨日雪なす肌

に敵の血潮を浴びた事も偲ばれる。

愛らしい其の眼は、革命後、百萬の民が塗炭と血に疾苦を見兼ねて、袖に涙を拂つて、怪物マラーの家へ向つたのであらう。

美なるコルデー、全身の熱情は鐵格子から、吾が頭髮に濡らすを感ずる。目と目と接して耻羞を覺える、今日活ける女を視た。

物質の頰波に東岸西岸の浮草、肉慾に心胸を燬いて爛らす沙漠の花。世界の女性の姿だ。

白粉と香水に憂身を窺す乙女。小さな家庭の鶯、餌を給され愛を囁き肉を齧ぐ妻。女の髪と運命とは古から變らぬ果敢なさ!!

革命の花、コルデー、佛蘭西の國家と人民とに、淨き處女の愛と靈肉を捧げたる君、髪は丈に足らず短かくとも、生命は千載に長いのである。イヤ多血佛國の青年は今も仍君を戀ふて居る。

嗟。當年、暗い狭い牢屋の窓から覗いた白百合の如な顔は、今大佛蘭

西の國の窓の燈明となつた。

昔は沈鬱のバイロン、アルプスの大雪に感興を催さなかつたさうだが、自分も頃日自然と人間に興味を感せぬ、幽愁の頭腦に熱情を得たのを偏に名畫の前に感謝する。

## 鳶

青疊の上に寢轉んで、何とも附かぬ空想に耽つてゐる。

自分は自分の情に耽溺して居るのだ、眞實自己ほど可愛いものは無いのだ。

二階の窓に蔭さす梧桐の色のくつきりと氣持よさ！ 人間の心臓と、

この葉の一枚、此の方が寧ろ夏に、清く男性的の色を帯びてゐるやうだ。梅雨霽つゆばれ、今日は久振りの晴天で心地が好い、太陽も陰鬱に飽いたかして赤ら面に笑つてゐる。永い間天路をウロッキ廻る厄介な若爺さまさ！

白い綿のやうな夏雲と些と許り離れて、鳥が一羽、輪を畫いてゐる。人間界の夢想家のやうに、空中に果敢ないことを繰返してゐる。

半ば睡つた眼に、何の鳥か明瞭分らなかつたが、善く視ると例の鳶の奴さ。

小さい乍ら羽根を勢一パイに張つて浮いて居る。極めて暢氣な活動家さ。平凡怠惰な私はいま、何とは知らず兩臉から涙が滲み出した。

那處とも無く漂泊の旅を懐ふた。

## 苗 賣

上方では夏の晝間には、金魚賣の聲が睡さうな聲で通るが、東京では彼の苗賣の聲は優雅で甚だ好いものだ。

苗賣の男に限つて屹度美しい聲を持てゐる。……朝顔や、胡瓜、茄子の苗……と呼はり乍ら小さい角形の筐を擔つて來るのだ。

『此の男、毎年々々。都大路を聲を練つて賣歩いたものだらう。聲の調子に一種の錆た節がある。』

私は何時であつたか、晝の夢にうつら／＼と爲てゐた其折。例の苗賣の聲が偶と胸に沁むで、故里の菜の青い畑地を思出して泣いた。今ま、パン、パン……と流行の露西亞パンを賣る男が通る。文明を賣歩く嫌やな聲だ。

## 夏の隅田川

荒い白地の浴衣が江戸ッ子に似あふ様に、隅田川も夏が一番に景色が佳い、幅廣い水がなみ／＼と威勢よく流れる。

夏の朝涼しさうなのは、水頭に羽搔く鷗、大川通ひ小蒸汽の白い胴腹、

二階の手欄に半玉の羅物の袖うすのもすゞしさうだ。水の肌から脱け出たやうな風がそよ／＼吹く。

暑くなる晝前から、種んな荷船、揚る帆が漸次に多くなつて来る。兩岸では夏の都會生活が、ますます／＼烈しく紛擾が加はる。長い隅田川に架る橋といふ橋の上に、俥の音が軽う飛ぶやうに走る。

複雑した川の眺めは、吾妻橋を向ふ土堤に渡らねばならぬ。サツポロピールの高い、赤煉瓦が、午後の太陽に照らされる。夏の日ながら、すみだ川の畔、江東の土を踏むことが、誰にも床しく、おもしろく感ぜられる。青いほつそりした柳が陰をこさへて立つ。

橋の根もとに荷足が一艘ぶく／＼浮く。之を見捨て、駄馬と共同便

所の横を通り、美人の廣告看板の色ペンキに夏の光線。ちさい橋の下に、和船が幾艘も浅い濁りに腹を漬けてゐる。

麥稈の帽子の上、湧く夏の雲は盛んなものだ。水に泛く船頭の深い帽子……古い頬冠のうへは、まして空の白雲が多く岸から見える。

夏は日中より、暮前の夕陽の方反つて熱が強い、色が思切り赤い。今青い濃い夏の空から、一時に灼やけどけた如な太陽照りに、隅田川一帯、大小舟のことごとく、パツと色彩を着けられる。橋の乗場に繫なく蒸汽の白と、灰鼠色に塗つた胴腹が暑く匂ひ、突出た乗場の板明るく、未だ新らしい船は別けて強い黄の色に照染まる。東岸に建つ倉庫の、白黒、薄い褐色に西日に輝く。

眼には恁んな物象を觀、心に昔の江戸時代の有様を想ひながら、風薫る夏の午後、すみだ川端を、夢現のやうブラリ／＼歩いて往く気分、これが全くの詩の境地だ。川一つ向ふの都會生活と、空氣がをかしい位に違ふ。

嗚呼、歌の都鳥の昔から、隅田川といふ古い、懐かしい、佳い名が、どんなに江戸ッ兒の情を動かし、血を湧かせたことであらう？ 絶世の美男子で歌人だつた在原業平、其人と姿を偲んでこゝらを徘徊した作者、風流人は定めて多かつたらう、………私は花の晩春、血を染めたやうな隅田川の夕水に、ほのほいろ炎色の都鳥(鷗)を見入つて、始めて昔の熱情詩人業平と其歌を、幻に髣髴うかべて冷たき現代に泣いた。

川邊の軟い青草を藉き、こゝ向島の土堤に憩んで今は船でも見る、鷗は水に居ても、鳥さへ昔のと色形が異つてゐる様だ。水はたい冷やかに流れる。

氣樂暢氣さうなは、水上船頭の生活だ。この趣味ある。東京名物の水に、何の位積めるか知らぬが、俵樽、石木材煉瓦、種々數々の物品を積載せた大小の荷物——廣い川の面に帆が並んで、又離れて飄乎と通ふのは、我が徳川時代の風景畫家の筆であらう。

隅田川上り下りも、木綿の帆の趣興に替りはない。帆は幅の廣狭、色に灰と黒とあるが、水色と調色して、なるべく古錆びた様な佳い。これ等の帆が時に川一パイに並ぶ、都會にも恁んな眺めが在るかしらと疑

ふ。帆を越えて向ふに、大東京の屋根瓦が無限に黒い。

あの孤帆に川風を含ませて、私は永遠に、海の方へ流れくゞて行つたら、身の愁も苦みも、涯なく深い海に其の何物であらうぞ。見よ帆布にさす夕日影ぬが人生には微ちひの光明くわうめいでもない。あゝ現時の世界思潮に漂ふ人類。

船頭の色は赭黒い、手馴れの長棹と臚と、銅色の脚とが、如何にも屈強で、辯も東京隅田の船頭たるを語つてゐる。服装は紺の腹掛、紺か白の股引、肌襦袢一枚で漕ぐのは、夏は水に涼しさう、頭は麥藁帽も頰冠りもある。私は一度、あの船頭衆の唄が聴きたい、夏の夜半杜鵑が、綾瀬の當りから雲に啼くときに一節。

船の縁から白いものが流れた、船頭の女房がバケツで米を磨いたのだ。船の底は夫婦めをとが家、川の空氣で丈夫な兒が育つ、赤ん坊が舳のところまで這遊ぶ。味のある船の生活、月夜に白らく細う立昇る炊煙、上流の蘆の邊りで闇の水に赤い火は、水滸傳式だ。

ふと乙な調子に私は側を向くと、土堤下小梅町の待合で三味線を弾いてゐた。濃い青葉に晝の三味線の音はしつくりと佳し。

渡船が向岸から着いた、十人ばかりの男女の乗合、若い綺麗な娘の形の浴衣と、赤い洋傘が目立つ。こゝの船頭は、姿から又別で所謂渡場の漢だ、一昔の渡船の情話を聞きたく思ふ、以前は百本杭と同じ此處で心中が多かつた。

まだ日は沈まず、川ところどころ、太い光線の反射した長い紋波が、水面をギラト、金色に織つて美しくしる。一時世に榮えた燦爛たる詩人の詩のやうだ、キーツの様虚しき金玉を水に描かく果敢なさ。あゝ落日の色彩美は、烈しく燃えるのが東洋の特色だ。隅田川から見る夕焼雲の美は確かに江戸式だ、夏の茜色の西空に涌く黄金色に緋の雲を散らして、真赤な大きな圓い太陽がくるく舞ひ沈む。こちらの岸に都會を流れる水を隔て、その華やかな天地を焼く爛射が遠く、かの緑の野にまで光がといく……贅くも言ふ茜の雲の色と、隅田の水の調子と、残る大江戸の懐かしい光景を見ることが出来る。一羽の翔ける黒い晚鴉も金色にぼかされて。

この時、淺草十二階の例の高い塔は、赭黝色しゃいしよくが薄茫はくぼうやりと霞んで少々光り立つ、観音の堂屋根の瓦が見られる、待乳山の緑の厚い森が俄かに明るく暮に入る。

對ひの岸に、青い樹が屏を色どる別荘風の家、會社の煙突が望まれる隅田の水は漸く沈々として暮れる。

夏の茂つた櫻の葉が續く、いはゆる墨堤十里の上に、薄暗い靄が急にかゝりだした。上流の彎曲した青蘆の蔭に、名物の行々子よしきりが啼くだらうし。千住まで行つた鯉釣の人は戻る頃だ、どこやらで會社の汽笛が鳴る。白い揃つたシャツを着た學生連の短艇が、今言問の所へ、すい〜と漕いで歸つた。

## 網納屋

上總の海は荒らい………。

九十九里の砂丘の上に建つ、網納屋の君が生活。——椽端から、紅い朝日も、大な月も恣まに眺められるといふ、風も戸板を吹通しだといふ、頗る面白からう。

其の網納屋の別の座敷、廣し一室の肴臭い疊の上に襦袍を着込むで、胡座をして居るのは、實に君だといふ。上總名物、大漁の模様のある、曙染、朱一杯のどんつくを頭から引被つた姿は、大に振つて居るであらう。

海が不漁で、漁に出ない時は、頑丈な漁夫連と共同生活の興味は？別の座敷に恰ど、君は牢屋の頭領然と、赤いのや、黒いのと、混交つて以て、顔はなか／＼小さからぬ。豪勢だ。

海の事は能く知らないが、網納屋といふから、平常は地曳網や、種々の網類が納れて有るのだらうね、海の網小屋の生活とは、馬鹿に洒落てゐる。網納屋の一方には、那の太いのが、深碧の海の色を爲たのが、うねり、くねりと、山のやう、黒う渦巻いて在るであらうが、之れに、幾十尋の彼の海中で以て、巨な魚の頭が數知れず引掛つたのだと思ふと、芬と何やら、肴の青臭いのも一種の趣味がある。

世の中は、網の目であると、自分は濱通、河岸を通る折によつて魚網



が三角形に、擴げて干晒^ほしてあるのを見て、毎にさう思ふ。

無論、憊うした網には、多く小魚斗りしか掛らないが、世間は、眞に之れが、現實、世相であるから争はれぬ。………観るから、綺麗な、併し細かい、一片の鱗も漏さぬ網の目だ。

爰に廣々した、蒼古の、大洋の上での網の働きは如何なものだらう。海が大きければ大きな丈け、巨魚も自由に逸れるであらうが、其の代り毎に頭が大きいし、時偶には河や、灣口杯では見られぬ怪物を獲る事がある。此方が、實に勝負に興味がある。

海へ遁れた、海に逸れた、と、よく君は言ふ、夫れで、まんまと、世相の網罟から脱し得たと考へて居るのか？現實から遠ざかつた、自由人

であると、空嘯^{そらうそぶ}いて豪放して居るのであるか。何んといつても、都會の囚はれ人よりか、君の方が矢張り自然に近い人だ。

上總の海は荒らい………。

九十九里は、其の波荒い、眞白の砂丘の上、彼の網納屋に住むで居るとは、吁、何んと思ふても面白い。趣味のある生活だ。

魚といひ、人間といひ、所有、生物を捕子に爲る——現實の網の渦巻を朝夕、隣りに眺め暮して居るとは、餘つ程、變つてゐる、飛離れてゐる。

東京神田××町、此の邊の一二年、市區改正以來、特に變つたのを、君は大方少しも知らぬであらうね！、君が住拵つて居た、あの古馴染の二階家杯は、夙くに夢と消えて跡方も止めぬ。

さしものに、有名であつた、吾等が梁山泊も、可惜、年月の爲めに壞されて仕舞つた。——梁山泊とは廿歳年代迄の外決して創建^たてられぬ、結社だ。でも、有繋に、近所に、例の酒店と、蕎麥屋とが珍らしく残つてゐる。

君の知つてゐる、町中切つての那の大きな雜貨店は近頃、素破らしい三階造りの洋館と建變つたが、何でも風聞に依ると、立派な割合に、以前程、到底も商買が引合はぬさうだ。年一年、不景氣の波が、洋館の白堊の腰へびたり〜と押寄せてゐる。

蕎麥屋といへば、此頃、新たに普請を仕たが、學生時代に、善ツくまア吾徒が俵を聯連ねて、第何次會から駈附けたものだと思ふ。彼の時分

眞にあの時分！學生の懷中に、金錢の融通が出来て居たものと不思議である。——お互に、今日夫んな威勢は更に〜無い。

梁山泊へ、時折顔を見せた仁で、酒は幾らでも飲み甘い物も亦幾らでも食^やるといふのが在つたが、恐らく今は其の一方に傾いたらう。現今で嗜好の最極端から最極端まで往く人はない、其れは、經濟事情や何か許さぬからに由らう。自分は、甘黨から、辛黨へ往つたが、最早普通の辛黨では満足能さぬ、酒に酔ふ杯いふ事は畢竟弱者の遣る所である。今後、辛いよりも苦がい、最も苦がい〜、世の中の苦がい殘滓までも醒めて居て啜りたい、所謂、毒を以つて毒をば制したのである。狼のやうに、此の眼を、この鋭敏なる感覺を以て、終生、之れが苦汁を、苦塊

を探し當てたい、掘り當てたいのである。然しながら、漸つと、これを探しあてた時は、即ち自分が黙つて現世の息を引取る最後であらう。

常に荒らひは單り上總の海許りでない。

昨日の新聞に神保町の十字街で、電車に轢かれて死んだ、六十歳近い老國學者の遺族の事が載せて有つたのに、悲惨の感じに袖を濡ほした。

東京市中で、電車の怪我人等あるのは、今日では敢て珍しい事ではない。海邊で、難破船があり、溺死人有るのと少しも噂が異つてゐない。人間は文明の空氣に馴れ、機關と一緒に、日も夜も齷齪と駆廻つて居る。誰やらが、神田須田町の電車交叉點を、東京市中の『親不知』と、言つたと聞いたが、之れは頗る好適の比喻だと思ふ。

併しながら、世の中は、東西南北、細かい、洩らさぬ網の目である。

人間が、幾ら、狂ひ、藻掻いたつて到底も詮方がない。自分は寧ろ、巨魚のやうに大きく藻掻き通したいと懷つてゐる。

上總の海は荒らひ……………。

九十九里の、廣濶い續く砂丘の上、網納屋に渦卷く蒼古の海をながめ暮す君は、寧ろ自然に近い人である。

都會人の夢にも及ばぬ自由の人である！

### 舟中の少年

紀州勝浦に近い名高い天然温泉。……薄赭い熱湯は斷えず巖の間に沸々と湧いて、石稜に色ある沫を咲かせつゝ飛散する。

自分は、此の温泉宿に逗留して早や三週間にもなる。

夏の日の午後、大い板石の上に素裸と爲つて幅廣の手拭で頬邊をゴシゴシやつて居ると、廊下傳ひに吟聲が流れてくる氣勢！

背後の方の杉戸をガラリと啓けて、無言の儘這入ッて來た青年がある。見れば、若いのに似合はない、瘦せて骨々した小さな軀幹。其でも白い肩先から熱湯は瀧の様にザブ／＼と流てゐる。自分は先づ口を切つて、

『君は、何時温泉へ來ました？』

『ハイ、二三日前！』

美しい髪の濡れてびたりと着いた額を些し見せた許り、極めて無愛想な返辭だ。

で、此日は夫れきりで別れた。

四五日經ッての晩。何の拍子だつたのか、不意と彼は、自分の部屋に訪問ねた。——南海紀州の端の荒涼の夕、自分も恰度宿に寂寞を感じて居つたので。

『曩日は、失禮を致しました。餘り退屈ですから、明日、海に舟で出て見ませんか？私は銃を持つて居ります……』

言語が甚だ馴々しく、熱意が其の色に動いて見えるので、自分も快く承諾した『孰れ明日』と、彼は微笑し乍ら部屋に還つた。

今ま、二人は浩盪たる蒼海の舟の中に在る。……………

彼は美しい且つ鋭い眸をキツト陸地の方に放つて、尙ほ烈しい雄辯を續ける。——濤は激しく怒號して舟縁に打ち登らうとする。

『事實、僕の家は貧乏です。雖然、元は士族の果です。貧乏人の忤でも、同じ學費を拂ッてる以上は、學校で金持の子も權利は對等です。仲間と交際ぬといつて輕蔑する理由はありますか？ 僕の家は貧乏です。新しい洋服を毎も着て同級と遊廻るのは到底も六ヶ敷いのです。其上私は人と交際ふのが大の嫌ひです……………』

波に白地の浴衣、細いが白い二の腕までも稍現はして、彼は熱烈なる語調を續ける。

『學校の待遇は、敢て成績の奈何に依らんのです。教師迄も級中の評判に動かされる。不公平の所置が多いで、私の前後は皆敵の眼憎惡の眼で充されてゐる。雖然、私は夫等の俗論衆愚に負けずに益々反抗の態度で勉強して居ます。私は人と交際ふのが大の嫌ひです。老父も亦其の通りです！』

青年は、語勢急に直下し、何か愁に沈むがやうに、『家父は、私の神經衰弱を心配して、道具を賣て、今度の旅費を拵へて呉れました』  
目蓋を掩ふ、拳を漏れて清い涙が傳はる。

噪騒ぎ持上ぐる大濤に、舟が一轉動くと同時に、彼は前の毅然たる元氣の姿勢に歸つた。

彼は突然、船底に弾装して横へられた銃を把上げて『貴君、御覽なさい！ 迥方の海中に衝立ッて居る巨な巖の角に、鵜の奴が三羽留ッて居ます。一つ舟行ッて、射撃ちませう甚だ痛快です。……私は縦ひ鳥類でも世界に生ある物は悉く憎む、弱い者にも同情はない。吁、學校で私と同じ貧乏人の子も、自分の品位を放擲ッて、金持の兒と附阿雷同して、私一人を苦め窘めたではありませんか？ 實に私は、反ッて強者に屈從する卑劣なる弱者の徒を惡みます』

言も終らず、銃を高く揚げた途端、轟然一發！ 數十間を隔て、彼の方の岩の空に白煙上ッて、蒼々たる波上に一羽の鵜の黑影は浮ぶ。

『萬歲!!!』少年の述懐に唇を緘んで耳傾けた自分は、驚起舟縁に躍上つ

た。——舟は濤に動搖めいて殆ど轉覆しさう。

『貴君！ 迥方の巖頭に磯鵜がある。ホーラ大な海鷲も留ッてゐる。吁、渾て世界に生ある物!! 岩から岩へ撃廻ッて、鳥類を悉く殺しませう。

私は、今日、此の廣い海中を禽共の血で以て、紅う染めねば止みませぬ………』

折から、波を渡り來る辛辣の東風は、白い額に少し垂下つた毛髪を吹いて、銃を手に決然として舟中に突立ッた美しい青年の姿！

海は撞と舟縁に打寄せ來ッて、終身「天才主義」「奮闘生活」を大音聲に讚美するが如く響き聽かれる。

人ひとり居ない、ガランとした、巢鴨の停車場の冷たい石畳の上に、私はいつの間にか電車を待つてゐた。

風はない、連日の乾燥しきつたすどい空気が、顔に眼に分らぬ薄い剃刀をあてるやうだ。

褐灰色の雀が、構内の亜鉛屋根の生白い廂を、喙でコツ／＼叩いてゐる。………寂しい暮前だ。

面が一つ、空気の裡にひよいと浮出て、私の方をちよい／＼と睨らむやうだ。彫つて拵へたやうな、白味の多い目を持つた面だ。

顔は驛夫なので、私はいんま氣附いたのだ。彼は首をあげてしげ／＼とこちらの額を覗ふ様子に視る。その白眼から發射されるひかりは、小さい白電の光のやうで、私は其度びに戦慄したのであつた。

私は郊外に、友の平和な家庭を訪ねるべく往く處だ、何と悪感を催させる、妨害的の變な面だらう？

浅い黒い帽を冠つた驛夫は、長箒で石畳をゆつくりと掃いて居る。破れさうな黒い靴、黒づくめの小倉の官服——十日も睡眠不足のやうな青白い角い貌、へしやげた扁平^{ひらた}い鼻………唯眼ばかりが活々と白光りをして、私の巢鴨へ來た神経を脅へさせる。

もう冬の日が沈むので、西の方雲が紅く焼けて、武藏野の枯木林に巨^{おほ}

偉な黄金光が、鵬の張擴げた翼のやうにパツと高射してゐる。

板橋通ひの客馬車が一臺、巢鴨橋の上を、喇叭吹きく、少し塵埃を颯げて駈抜けて行つた。

二本の鐵道線路が夕日に照らされて長々と、南北に白光をして強烈な神經的に走つてゐる。眸をその方へむけ落すと、弱つた視力に痛みを覺える。

赤い電車の來たを幸ひ、怖ろしい蒼白い顔から追はれて、私は代々木の方へ逃げたのであつた。

## 橋

北村透谷の棲んで居つた、數寄屋橋を抜けて左へ折れると、俄に生温かい風が自分の頬を撫でた。

西洋造の窓かち、瓦斯か、ストーブの暖氣の洩れるのか？と思つて見る。と、濠の方よりも氣持の悪いのが、片頬に吹いて來る。——やはり天氣の加減だ。

十三日の午後は、恰度四月の空の日和で、私が肌は、怪しく魔力を感じて、心臓は刹那に沸えた。何だか萬有に叛謀心を曠かされる。

斯んな時に大地震は起こる。兩側の家屋が倒れたら、嘸奇觀だナ！と



一寸道に立停つて薄笑ふ。地が破れたら自分も墜込んで死ぬると懐ふ。角を右に廻つて、小さな橋の所へ來た。青物市場が傍に在る。ガヤト喚つて居る人の上を、太陽は靜かに照してをる。

男の十人もが、兩方の欄干に腰打掛けたが、『何だか、變な天氣だナ……』『明日は雨か、急に地震でも來さうだ!』と一人が合槌、おのくの顔に不安の色が浮ぶ。

東京中が潰れたら、數百萬の人獸の爲め惡血濁血を清むる青菜を、毎日運びはたらく必要も無からうし。——汚い着物をきて居ても、全く生命は惜いものと見える。

空には怪しい雲が荐りに動く。犬が一匹吠えて走つた。

## 汚れ身

觀世音光り玉ふ淺草は、罪の闇黒の詩趣に富むだ處だ。

其の向ふの白堊臺には、肉慾濟度の菩薩の君達がツラリと並んで居る。その中で小君といふ美娼、晝間三階の欄桁に白い人形の様な手をかけて、孤り思ひは越後の空へ飛ぶ。

生れ故郷、蒲原郡の家に居た時は、看護婦の被る雪のやうな仕事服を着て、機を織つてゐた。あの緑の桑畑の間から香水の芬をさして村長の若旦那、吉さん許へ這んな事なら嫁けば善かつた。トンカタン／＼獨り

織つて居る窓際へ朝晩泣いて頼まれたに、横を向て唄で撥付けたのが恨めしい。女の操はお金で賣れぬと小學校がくかうの先生に習つたのが恨めしい。赤い物に包んだ汚れぬいた肌に今夜來る客は誰であらう、那の雲の峯は越後の山かしら！ホロリと白粉臭い衣裳の膝を濡らす。

自分は縁日で金魚を見ると、毎も紅羅の女郎を聯想するが、今ま淺草の池邊に佇立んで、話に聞いた小娼を目に浮べた。

自由の波が吉原の大門に押寄せたら、髪の長い何千の綺麗な渠等は魚の如に行動を得るであらう。年中涙の洪水が一時に漲溢るであらう。――是非とも自由の浪を導かねばならぬ、イヤ熱腸から絞り出さねばならぬと考へた。

## 熱情

頃日は人間に情味を感せぬ。社會に趣味を有たぬ。自分の頭腦も漸々冷たくなつてくる、之れでは平凡、何と人形の仲間入をしさうだ。

昨夜更けて、獨り座つた。折柄蟲の音に興を惹いて、冷い頭を壁に附けた、十里も先で鈴を振るがやうで、幽かにも傳はらない。黙々たる夜寒の壁！頭の爲に悲ます。

立て庭に下りた。紅い草花の間に額深く差入れた、髪と眉が露に濡れた許り、些少も血潮は湧かない、花吾が爲に情は無い。

今ま、熱情を太陽に呼んで、大道に佇つて居る。双手を高く舞はせば秋風腕を廻りてソク／＼と滑るが、頭に熱氣を生じない。

扱も吾が頭顱!!石と成つたか、木と化つたか、髪を握るの眼に入るは、飄々と空飛ぶ白雲も吾れに漂泊を教うる濤の姿、都會の空氣に鈍れ腐つた頭上高う、折しも渡鳥が過ぐる。

雲の形、鳥の影、自分は何時しか安藤坂の上に来て居た。遙かに白う富士が見える。

吁、甲峽の一歳は奈何に情熱家であつたらう。吾が溢るゝ熱血に積雪赤う溶けて流れた、悲憤の涙に到る處の雪は湯となつた。孤乎、寂寥に堪へかねて、廣い郊外の雪を踏んだ時、旅の慰藉は爾富士であつた。お

お、吾が火の如き情熱は、大雪の不二を燒盡す程猛烈であつた。

亦是、先年越の福井の雪にも負けなかつた、劇しい吹雪の中を長髪を振つて、九十九橋の邊を放歌徘徊した。高い料理店の層樓から、酒氣と不平を虹の如く吐いた折、福井全市の家根の雪一時に軒の雨となつた位、洵に熱烈怖るべきであつた。——現在は瓦石の頭にも、當年雪よりも白い羽二重を織る彼の女工の唄に、甚く感じて涕きもした。

懐しきは漂浪の生涯よ。吾が頭上に都會の塵か、名か、戀か、富か、又は人間の冷酷か、其の意識せずして現代風潮に侵されたのか?!嗟、自ら非情冷酷に成つたに驚かざるを得ない。

東に日は昇らずも可、西に月の永久に沈むもよし、之等の物共に滅す

るに任す、詩人の頭に熱あらしめよ、光明あらしめよ、太平洋の水悉く乾くも可し、詩家の胸に血潮湧かしめよ。あはれ、情なく、熱なくして人を動さんとするは、風の蘆葉を戦がすよりも難い。

人間強烈なる感情の嚮ふ處、天の雲も爛落つべく、石塊も舞ひ上るべし。理窟と科學の如きは一條の蕘にも足らない。

見渡せば、實に荒涼悲慘の世、顧みて吾も淋しき影の一と懷へば、初めて涙襟に下らざるを得ない。

是より天寒く、吾が心益々冷ゆるか。これ自らの恐怖である、死である。

嗚呼、爾富士よ!! 曾て胸に餘つて、其の雪深く嶺に埋めたる、情熱と

憤怒と而して悲涙とを吾に返せよ。歸へれ火鳥の翅! 吾も元は熱血の兒であつた。

斯くて尙ほ、最早狂熱に燃え得ずば、吾は、再び甲斐の山に走つて、永劫の雪に軀は埋れ死ぬであらう。

## 風濤の別れ

五月二十五日、青葉と初鯉の鎌倉を去つて江の島に遊んだ。

銀月子と極樂寺の前で別れたが、兩人聲をヤア! と掛けて振顧つた後姿は何となく暗く淋しく、孰れも極樂淨土で往生出來さうにない男、地

獄往とドウヤラ相場が定つてゐさうだ。目下切りに筆を駛らし『近世陰謀家列傳』を書く銀月よりも『薄命傳』を綴る自分の方が少しは罪が軽いかも知れない。

江の島へ電車に乗るのも興味が無い、海岸傳ひに行く事にした。鎌倉大佛を侍らせ氣焰を聽聞させ乍ら、友と呷つた酒は未だ醒めない。

初夏の光に稍熱を帯んだ續く大巖を跣足で歩む心地よさ！右の手には正宗の二合壺を持ち、左には下駄を引提げてゐる。宛ら天真の小兒時代に復つた心意氣、吾前には熾んに大勢力を發現してゐる元氣自然の波ばかり、虚飾姑息なる人間共の影は無い。都會の交際、偽善的形式に飽き飽きして居る自分は、何となく心が伸びる氣持がした。弱々しい神経的

の人間の息が鼻に附いたが、今は海潮の辛辣なる鹽香に壯快を覺える。沖から吹いて來る青嵐が、麥稈帽子を傾けて額を洩れる髪を翻弄る。

空を瞻上ぐれば蒼々たる海天！ 下には裾を蹙げて脛は露はに下駄をブラ提げて矢張り行く。貴人の別莊らしい小高い處から駈けて來て小犬が吾姿に吠えた、其れも面白い。自分は故郷の田舎に兒童の時に健まに遊んだ事を憶起すと、何だか長い睫に熱いヤツが溢れて頑黒な岩の上へ落ちる、久しく都會で涙杯乾いて火の如な眼窩の底から怪しく濕つて來た。此處に甫めて人間社會に對する憤怒も釋けて自然兒と成つた。激烈狂奔の海の前に落とす涙は女性的の物でない、情迫つて實に迸出る強熱の男性的のものだ、茫茫天地の間人目なければ、泣くも喚くも將た放歌高吟

するも誰憚かる事も無く全くの自由である、自分は浦曲を續く巖上を一町も鹿の如く疾走した。

倏然^{たちまち}面前に當つて稍霞むで人群りがある。無論裸體か日に赤う見える所は漁夫に的つてはゐるが、一艘の船の砂地へ上げられて在るのは地曳網では莫からうか？正宗の利いた加減か眼は少し朦朧としてゐる。

今海は劇しく怒鳴つて吾を激せよと騒ぐ、汝人間!!人間の手にて醸せし美酒に酔うて大自然の如く狂し得るやと叫ぶ。雄波雌波が妖魔の如く大舞踏を始めた、白鷗は長翼を張擴げて大甕を破るに似て謠ふ、雲迄も初夏の日射に朱に焼かれて飄々として舞ひ下る光景………此時吾に大自然に對抗し得べき強烈の酒が欲しい、吁、弱き自我よ、深淵に蒞みて

は酒の紅頬も色青褪める儂さ!大醉淋漓の中も嘗て人に負けぬ自分も大自然の海に勝ち得ない、海を罵倒して凹ませ鎮壓する力は無い。其昔、詩人バイロンが渦捲く如き長髪を振つて大洋を一帝國より豪なりと極言讚美した以來、海は今も變らず地上に威力を示してゐる、人間は自然と死の前には塵の如く憐れむべしだ。萬有に呑まれて甚しく注意を怠れば夕には骨灰と消失せる、未だ荒野を走る獅子や狼は自由に大膽に生存に恐怖する必要は無い、殊に文明の人間は弱軟き軀を提げて大自然との斷間ない戦闘と、加ふるに生活の危険の爲に神氣は常に衰へ、恰も油少ない機關の有様であるのだ。今、自分も醉歩一步を過つたら、忽ちブクブクと泡沫の音を殘して、小ばけな魚の口にも頭や額をツ、かれるのだ、

一莖の荆棘さへも蹴れぬ人間の足に、奈何で大海の濤が蹴れやうぞ。畢竟人類は日夜不安苦痛を免れぬが爲に藻掻いてゐるのだ、然し、絶えざる悪闘の中には天然の大強王に打勝てる術が発見されぬとも限らぬ。現今の科學者は謂はずもがな、古來詩人は之れが最も雄なる者であつて、狂哲學者ニイチエの如きは天上界青雲の邊から神迄も殘酷無禮にも引降して人間と伍せて了つた、獨逸の森林から出て嵐の如く絶叫して狂人と成つたが人間の血と雖も敢て輕蔑できぬ豪物だ。元來詩人には薄命蒲柳の人が多いが、精神は獨り俗人とは異つて自由放棄だ、故に昔から之を天馬に喩へられる。

空想に耽つた目を落すと、足下に青い物が堆まれて方々に土山のやうに爲れてある。漁師風の漢子に此藻の名を聞いてみると、「勝布」と稱ふ物ださうな、其色蒼々として新鮮の海の香は満々してゐる。渠等は此日は魚を漁らず此海草を採りに沖に船出して、濱へ還つた許りだ。

婦あり、何れ漁夫の女房だらう——赧ちやけた頭髮は日に焦けたのだらう藻よりも亂れて面妖怪の如きが、襪襦布から腰部は太股のまゝ水に坐つて居る、婦は今丘の上から海に注入る流で、泥砂に汚れた身體を坐り乍ら濯落してゐるのだ。薄黯い皮膚は海邊の生活だけ油ぎつてはをるが、大きな無花果の様の乳房がダラリと下つて、一見不快の感じを與へられる女。

露國ゴルキーの小説の背景に有りさうな女に男！ 哀れ貧賤な海稼ぎ

の配偶とはいへ、之れでも女かと言ひたくなつて佇て視ると熟々、人間性慾の烈しさと、潜む強き力を想はれて悚乎と爲たのである。爾り、彼等が魚を漁り、海に藻を採るも所詮人の満足つまりを欲するからなのだ。

社會に名無く富無く、渺茫たる青海に粟の如き身を任せて果敢ない夢の希望を抱く海人、丸々した頑健な赤銅色の裸體漢も陸に上つては、襤褸の荒布を纏うて佗しく生活すると思へば、女にも男にも同情の涙は砂地に夕立のやうに俄に降るのである。吾が心は非常に充實して血が騒いで來たが、最早手に持つ櫻正宗の塚は空になつたと識らず物に憤つて巖上に投げ碎いた。

多恨觸目に感情を動かすは却つて笑ふべきか、先刻は鎌倉八幡宮前の

银杏樹の蔭を徘徊して、金槐集きんくわいしゅうの著者の横死に一斗の血を搾り。今は江の島迄浪と鳥の外人ほかひとも無い巖の道で、名もない賤漁夫に出會ひ涙を兩拳に揮ふた。噫、詩人が銳利匕首に似る神経は終に自らの肉を殺ぎ骨を削るのだ。之を懷へば書を讀まず智慧も無い汝漁人から、此方が反つて一滴の露を受くべきでもあらう？

兎に角、軽い錢囊を拂いて少々光る物を取り出して、四五人の男の手に渡して、前に目的であつた江の島は浮いたやうに迥に眺めたばかり、飄然として風の如くに京に立去つたのである。——其跡で漁師連は例の波打際の巖上で、酒に醉歌して舞踊つたか夫んな事は知らない。

其夜、辨財天の姿艶美な江の島の旅館の高樓でよし臥つても、甘い露



の安夢を結べやうとも思はれない。酒を巨魚の水吸ふやうに呑んでも胸裏の凝塊が解けるとも考へられぬ、實際余輩は人間の手に醸つた酒如きで自己を忘れる底の男では無いのである。

## 闇 黒

青山に友を訪ねんとして、三丁目まで来た。額に垂るゝ長髪をソツト拂ふと、遙か向ふに真白い大雪の富士が見える、夕陽は赤々と回眩くるめいて落つる。正に一枚天の青紙に、大哲の姿と、詩人の面影！予は、左手熱烈なる日輪を抱き、右手雪芙蓉に拈觸ねんじよくせんと欲し、半町許りも疾走した。

甲州は予に忘れぬ地である。富嶽の積雪の中には、種々の記憶が埋められて在る。曾て播盆すりぼんじやう状の峽中に火柱の如な身を留めた、其の一年間の憤怒や悲哀が、未だ雪深く埋められてあるのだ。丁度、わが形骸は數尺の墓穴に入つても、大なる思想、熱烈の感情は、永劫天地萬物に遺して置くがやうに。

冬の雪國、新聞記者の生活も、面白く無いのもなかつた。

予は編輯局よりも、多くは工場で日を暮らした。炭火の山盛に熾んに起つてゐる角火鉢に、晏然と股火する。仕事の隙々には職工等は集まつて、雑談は火氣と盛に湧上る、歡笑は我等の顔色を紅ら染めた。平凡形式的な極樂より、地獄の方を甚だ愛する予に、奈何にも趣味ある生活で

有つたのである。

何時も職工と予とは味方で、雑多の苦情を聴き、自分も亦旅情を語つて、朋輩同様の姿。山よ！川よ！杯其の筆癖を真似て自分を呼ぶ。夫れが、敢て侮辱とも思はぬのみか、感情的の言葉を以て返へし、渠等が無邪氣な腹を愛した。否、予の書放しな文章をば、熱心に拾ひ、植ゑくれる勞力を考へた事は度々、其の讀みもて行く聲の悲壯な局所に達ると、予は知らず識らず涙の下つた折もあつた。

社が給料を仕拂はなかつた時は、渠等は随分激昂した。『社も破滅つぶれるんだ、解散！解散！』と絶叫して、工場の古板を壊して、火鉢に投込む氣早者もあつたが、お蔭で自分は暖い目をしたのである。

インキや油が着いた、種々の顔は覺えて居る。皆人の善さそうな面でも酒嗜の老職工は特に愉快な男であつたし、ゴルキ一の勞働時代を偲ばせる——文學好の青年も居り、また眞面目腐つた近眼の植字もをつたが、一人予は憐れむべき少年に同情をしたので。

少年は、何でも甲府の貧乏人の悴ださうだ、學校に往く兒等と道筋を違へて、一年も新聞社の門を潜るのださうなが、始終小さな顔の半分を墨に黒うして居た。

余は或日、左の如き即興詩

浮世の様を人の手に

集めて組み立てうつしては

闇 黒

人に見すなる新聞社  
日々にかわるは現世うつしよや  
人も機械も忙しけれ。

塵と鉛の工場に

組みし活字をくづしつゝ、  
朝に勤勉いそしむ小童あり、  
仕事を問へば「解版」と  
答へやすらん、振り向きて。

人の心と、世はいつも  
労働く兒等に寒けれど、  
冬は活字の冷たさに  
凍る指頭赤からで  
インキに染みて眞黒なり。

顔に墨をば塗られては  
笑ひもすれど、過失てば  
鐵の拳のあら痛たや、  
泣けば字拾ふ文選や

闇 黒

植字の聲に消えてゆく。

こゝも浮世か、そが中に  
別くる活字の文字よりも、  
早く憂世の憂の字を  
知りて兒等こどもぞいと狭き  
學びの校いへに習ふなり。

此は、お前の事だ！と讀んで聞かせると、地の白い雪のやうな顔を、  
境遇の耻ひに赤うして、小さな前齒二本の眞珠を見せた瞬間、垂俛うなだれて  
了つた可憐さ!!職工一同はドット大笑を爲たので、小鹿の様に物蔭に隠

れた姿も滑稽であつた。

夫れから、四十近い運轉手が居つたが、彼は印刷機械の車輪を廻轉す  
爲めに、此世に生れて來た物のやうで、腕が機械か、機械が腕か、孰ら  
とも名狀出來ない。嗚呼、墓に安全な休所が在るといふは、此人と雖も  
夙に知て居つたらうが……。

此の運轉手に與へた詩に

まはれ、まはれ、まはれよ車輪、

鐵の車よ廻轉らずば

生命の車止みぬべし、

まはれ、まはれ、まはれよ車輪、

闇 黒

腕の力の續くまで。

歳はめぐりていと疾く  
車と共にめぐりつゝ  
多くの年を経たりけり、  
移り進むは世なれども  
吾や變らで老いんのみ。

悒鬱^{いよせ}き暗き工場に  
花と快樂^{けらく}に背きつゝ、

人の心の冷たさの  
鐵の機械に屈みつゝ  
生命の糧を求むなり。

若き誇りは昨日今日、  
鐵の鑄よりいや疾く  
おのが頭に雪ぞ置き、  
破損^{こは}る機械に先だちて  
疲弱^{つか}れて老て捨てられむ。

闇 黒

汗と涙を油にて

車廻轉すも幾ばくか、

まはれ、まはれ、まはれよ車輪、

年もまはれよいと早く

死屍を墓へ運ぶべく。

予は、雪の甲峽に、罵倒の火の霰を散々吐いて、飄然として京に還つたが、後にて聞けば、其社は間もなく破潰れて了つたとの事であつた。哀れ、職工連は今何處の新聞社で労働して居るであらう？

鳥の古巢を慕ふ如く、種々の記憶は、遠く富士の雪中より出でて、今わが胸に歸つて來る。が、雷だ返らぬのは、當時有餘つて雪深く埋めたらない。吾が情熱である、いま火の如き眼には炎々たる雪中の大紅蓮が明瞭に視えるけれど、此の冷めたき荒れた敗墟の胸には、再び情熱の火の翅は還らない。

哀れ、雪の山に辱めらるまで吾身は墮落し。女の胸に乳は涸れぬとも、われに熱血は乾いて了つた。有繫溢れ落つる涙の熱さは感ずるけれど。

雲が出た！山巔に雲が起つた。悪魔のやうな黒雲が蔽ひかゝる。——千萬の天使の柔肌が重なつた様な雪嶺に。

雲は甲州の名物だ、此地雲の出沒變化は、大に人目を驚駭かせる。飄々として山から嶺へ飛ぶ時は、宛然亡靈の如に、老婆の白髪はたの如に、天軍の旌旗はたに似たりや、北山は雨、南山は日、之れ皆雲の曲者の仕業である

のだ。

吾れの冷情を嘲けつて、大日輪は今ま焼け落ちた。甲州の方微かにはの白う、唯だ黒雲の蔭がるのみ。目を擧ぐれば、都會の空にも、夕暮の雲が起つて團また團、遠方のと相對浮してゐる奇觀……、吾胸も全く闇黒である。

## 幻影

櫻が咲いた。柳も芽を吹いて、もう此れは十七八の女の髪の毛のやうに、緑髪を稍々重たげに、つげの櫛でも入れてほしさうだ。

今朝、私は目を覺まして、戸口を開け、春の薄明の光に瞳竅めあなに些か眩ばゆく、襟筋へ少し零れた齒磨粉が光つた。

盲啞學校の、高い蒼味を帯びた建物の屋根の上、その上に眞白い北から南へ流れてゐる雲を、何の氣もなく私は眺入つた。

昨夜は、男や女の顔や、波や舟や満月や、様々の怪しい、魔の悪夢に襲はれ通しで、今曉けさ、春の心地の良い暖い蒲團を不安の思ひで抜出たの今だ。男性の少し赤味のある腕首に、或種の充ちた強い力がある。

春の綿を聯いで、天地の間に關はずわざと擲り投げた様の白雲。私は今日も奔放な美しい詩の國にあそぶ心持がして、昨宵の夢の不安不穩を、門口の細い溝口の中に棄込んで仕舞つた。

あゝ、不安よ、悪夢よ泥溝の中こそ、汝共の住むべき、蛇の如な、烟と霧の如な形状の物の逸去るべき、好適の場處であらう。而も陰鬱な私が春燈の側で世界併呑英雄の夢を見るの代りに青い詩に囚はれて態々、春の夜具の裡で獨り孕んだ夢だ、不安だ、さらば……、泥溝の裏にも流石は春だ、黒い粘い泥も醗酵して温るく溶けてゐる。

私は、此時溝の面から、不意と顔を舉げた。私の赤く膨れた眼の前を、偶と掠め過ぎた一物の影がある。確に鳥だ。

其れは、私に鳥の中でも、一番に好きな燕であつた。今歳の春に、第一に私の瞳に現はれた嬉しい幻影である。若い女の胸の如う、この燕の雪白の柔かい胸に、少年時代から、如何なに私は憧がれたであらう！そ

して、亦此の燕のやう私の白い小さな足が、東西南北と四方を飛廻つたであらう。學校時代に私は燕の詩人と綽名を爲れた位だ。

あの可愛い圓い眼の燕に、睫が有るかは知らぬが、自分の目の睫は人並より長くつて、始終小兒の時から涙に濡れ勝であつた。私は、空の雲と燕は、神様よりも人間よりも、優つて好きであつた。蜻蛉釣りに往つて夏草の中で獨りで泣いて居た事もある。随つて花にも慰められた。

小學校の教師は自分を呼んで、粗暴活潑の子と云つたが、其れは確に私の性質の半面で、人間に反抗する心から起つたのだ。して、此の狂暴な自由を愛する心は、皆自然の雲や嵐や鳥やから習得たのであつた。

私のロマンチックは、この小兒の頃から胸に深く植付けられたので在



つて、終生烟の如くに消去らうとも思はれない。私は小雲のやう此世に不思議に生れて来たから、また雲の様に飄奇に驚かせて大膽に去りたい。自分が他日筆を折り紙を焼いて國の外に、英雄的風雲の事業を起す事があつても、必ず斯のロマンチックの熱烈と變化から離れぬと念ふ。古昔から、詩人哲人學者の書籍も、英雄の劔も、畢竟みなロマンチックから胚胎した。自分は古刀を抜いて熟々其面を瞻めると、ロマンチックの匂香が鼻を衝いてならぬ、劔と詩との間に戀愛のやうに男子の心が迷ふ。私は、今でもカーライルの英雄崇拜論は古今を喝破した活論と信ずる。

燕！燕が復折返して来た。戻りには若者の様口笛を軽く吹いて、この

熱し切つた頭の上を、軒端をツイと細身に掠めて三間程向ふに飛去つた。

私は今度は偶と、一代の漂泊詩人ハーン先生が心に浮んだ。彼の名まで小泉八雲と日本に改めた眇眼の詩人よ、南方的ロマンチック代表的詩人よ、歐洲、亞米利加、果は我が日本に迄でも、南へ南へと春を尋ぬる燕に似たハーン氏の懐かしい姿が、空中に幻影の如くに現はれた。吁、漂泊の果は、日本の女を娶り剩さへ日本の土とまで成つた、優しい愛すべき、眞個骨まで詩人らしき詩人八雲先生………。

私は、識らずに、熱い泪が敷居口の石の上にホロ／＼と滾れ落ちた。

我が日本は夫んな詩の國であつたかと、私は首を回らして見た。

## 秋風語

此節は秋風に嗟かされる故か、例の飄遊病が差興つて、平原の鳥の如に少しも落着けない。で、今日も壁と書物を木の葉と見棄て、寓を出た。衣の裾が水のやうで骨に心地がよい。

秋の日は劍氣を洩して、百舌もすのキビト〜しい聲が植物園の杜から、自分の頭腦に響く。

途すがらの人間は固より眼中に無い。雲は相も替らず飄々と空を飛ぶ、天下の浪人の目には雲は面白い情婦だと、微笑して行く。先年の漂泊に九州の山の頂、北陸の海の邊りで、雲と臥た果敢ない別れを思出す。人

間の事は悉皆忘れて了つた。

何時しか池の端に来て居る。秋の暮の不忍池は寂しうて氣に入つた、唯、蓮の枯葉が黒う今の人間の心臓に似て、乾涸びてクツ、いてゐる。魚も潑刺はねない。

池の北の方へ廻る。博覽會の殘骸は物質破壊の名殘を留めてゐる、自然の邪魔物は早く斧を加へたらよからうが、茲に青い土色の獅子の像が据えられて在るは奇抜だ。家を出てから、人間の面や、商店の物品や、見る物の平凡さに飽々して來た自分は、是に於て始めて稍満足して快と呼んだ。

東京上野池の端も、丁度亞非利加の野の様に自分の自然眼に見える。

いま作者の誰彼を論ずる違はない、勇猛無比の獸王は爰に傲然として居る。其の波濤に似た長い鬣は巨大の頭に冠さつて、上野の山の森から吹く颯々の秋風に、毛は一時に振起たんとする姿、力ある四肢は走り出さぬ勢！自分に彫刻家の腕あらば、直に強烈なる吾が身熱を採つて、此の獅子像の兩眼に入れ、以て、現下柔弱なる人類の群へ市に放つであらう、と感じた位甚だ興趣が有る。

で、東京市中に晝夜文明病の顔色蒼う、無意味に活動してゐる、所謂平凡の俗衆より遙か、此の死せる獅子の方が威嚴あつて大に豪い、面白い、氣力が溢れてゐる。イヤ不忍池の鴨でも、人間の様に生活に齷齪してゐない、自由放恣で天地に思ふまゝをやつて居る。―向ふ、上野の大

道を往來の人が憐れに見られる。吁、人間社會には、餘り繁竅な習慣や結縛が多くあり過ぐる。

自分は感慨に思沈むで、東照宮の石階を上つて森に入つた。此處は晩秋の光景一變、山は秋風烈しく杜を吹通して、木葉が散りくゞに舞ふ、枝ながら枯れた杉の落ちるもある。吁、秋の聲!! 古い杉の大木の列の上を、風は漸瀝と吹渡つて、正に自然が大に怒號するやうだ。實に荒涼慘澹の有様! 恰も露西亞の野の景色を思出した、と見る、森の彼方から『人よ、自由に大膽に天地に放浪せよ』と文豪ゴルキーの絶叫ぶらしい、自然の聲が判かに聞かれる。吾が三千の毛髪は刹那に風に逆立つたのである。

自分は切に勧める。塵の市中で下らぬ演説説教を聴くより、士女よ、静寂の森に自然の大なる聲を聞け！平凡の人間共と接見するより、愚な陳腐な書物を讀むよりも、試に來つて、上野に彼の勇猛なる獅子王の像を見よや。

## 鶏

隣家の赤い腰卷の細君が居なくなつて、紅い鶏冠の鶏が來た。今曉、未明に、コカコッコと高い聲に一つ鳴いた。之れから不眠症の私が、定つて苦しめられる事だらう。見たら白色の汚い牡鶏だつた。

三十を過ぎた、あの細君は何處へ越したらう。赤い腰卷のダラシない姿をして、無花果の青葉の蔽ふた狭い裏庭で、洗濯か何かして、一日立働いて居た。亭主は鍼按腹の盲人らしかつた。

私は二階から、枝の葉が青い滑かな光線を射す下に、赤い嫌な色を度々見せられた。

亭主は常終、家の中で叱られて居た。唇は赤くはなかつたが、女房は艶々した顔に白粉を塗つてゐた。

此亭主に眼を明かせて、金を持たせたら、女房は必と粧飾はぬ女山羊のやう直と柔順に成るだらう。細君も虚榮心に富んだ日本の女だ。

私は、女の赤い動物に鞭三百を加へたかつた。併し、細君も最う引越

して居なす。

昨日、白色い牡鶏が来た。私は定つて曉の睡、不眠症を苦しめられる事だらう。

蟬の音楽

雲と、雷と、夕立が多くて、此夏は洵に男には快適である。私は萬葉集と金槐集の季節であると、涼味を入れて獨唱してゐる。

植物園の緑の梢に雨の音楽のやうに、蜩が鳴く。秋の時雨の鹽梅に二

階の障子をザア／＼と叩く音ともなる。

白い枕に肱を掛けて、蒲團の上に仰向けに臥ながらに雲を観る。眞白い雲の層が海の潮のやうで、蒼い空はいつも見る青さで、病める身に充實する物はすべて静だ。

生れて間もない蝶々が、簇れて、軽くおだやかに、晚れた花に似て植物園の高い樹を舞ひ廻る、見果てぬ夢の如うである。

今ま、火のやうな西日が、かん／＼と黒い數本の大木の枝の繁りを、燃やす様に眞赤で廣く照らした。障子がポーツと薄赤うなつて、猩々緋の空の断面が、赫と私の眼に迫つた。

俄に、ワツと泣き出すやうな、絶叫するやうな、蜩の諸る聲……。

ツイ、と熱い油を軀に流すらしい、苦悶的の油蟬の烈しい音楽……。私は小供の時から油蟬を聞くと、石川五右衛門の一子が七條河原での釜茹を連想する、五右衛門が天下の大盗賊のやう唄はれたは、戯作者輩の眞赤な嘘の徒らだ。彼は關白秀吉の首盗人であつた、歴史は總て夏の強い容赦ない光に曝すべきである。

私の頭腦は、せみの雨の亂聲に、宛ら白金で硲するやうにキリ／＼と痛快な、感心の可い刺戟を覺えた。私の少し長い萬筋の黒い毛髪が秋風にのやう戦いだ。

暮前、怪しい雲が出て、空は曇つた。先の大木の間にはピカ／＼青光り

が射した、雷の前徴である。千萬の青葉が悉く顫ふ。

サツと銀線のやうな夕立が矢繼早に降つて來た。

鯛、油蟬が、一齊に聲を揃へ、拍子を合せ、更に急激猛烈に鳴立てた。可憐なる一團が大自然に反抗し、戰鬥を挑むのである。

女 優

赤坂見附から夜の電車に乗つた。外濠線電車の箱は、夏の夜の涼味津々として満ちてゐる。

白い雲の中へ、銀砂子をバラ撒いたやうな星は疎らに夜は十一時頃だ

らう。暗い濠で蛙がコロ／＼と色氣をもつて鳴く。

私は電燈の光で、偶と横を向いた、隣りに妙な若い女が腰掛けてゐる。中形の派手な柄の浴衣を着て、油付けずの梳髪に①のやうな髻を載つてゐた。

覺えがある、三崎座の女優だ。いつも白木屋お駒とかお染お七や、あどけない、おぼこな美しい娘を扮る、某といふ若い女優だつた。

儲お粧装は怕ろしいもの、舞臺と素顔と、大した相違だ。白粉焼がした蒼白い頬、洒落りとはして居るが、衣服と帯が至つてお龜末だ、白足袋の端を見るも一種の物哀れだ。

女俳優は黙つてすまして居る。處女の匂ひは無い。私は、佛國の名女

優サテ、ベルナールの事を、大統領や帝王と握手し、堂々たる現世の天國爛熟した交際社會の華と唄はれる彼、年齢六十を過ぎて尙顔珠かんぼせの美其のサテ女優を思ふと。如何にも、日本三崎座の女優を憫れまらずに居られぬ、固より技倆や何やは扱置いての話で。

往時岩井半四郎は、平常女装して、江戸娘連は、其の濃艶な容姿の前に顔色が無かつたさうな、現今の女優はみじめである。

然し、此女にも、女子の獨立の自尊心、誇矜が細い俤にも見えて、私は嬉しく感じた。

電車を水道橋で降りて彼女と、私は別れた。

煙草入

和軒子が見えた。腰から珍らしく葺入を抜いて、煙管でスパク吸つて居る。

煙草入は、紙撚で編んだのを漆で固めて、一閑張のやうに製つたものだ。緒締は胡桃に竹林七賢人を彫つて、中々古雅で振つてゐる。木綿の青紐も却つて佳い。

原町に住んで居た折、道傍で女房が指で紙撚を拈くろのを見た。今更其の謎が解けた。寂しい位、静かな原町の御寺、一行院の門前に立ち乍

ら、赤ン坊を脊中にした蒼白い女房が、頻りと熱心に黙つて紙捻を編でゐたが、矢張り煙草入の筒であつたのだ。

佛畫に有るやうな、一行院の巨な、高い屋根瓦の上に、フウワリと浮いた白い圓い雲、……其下に、青い女房の指に持つ白い紙捻……、貧しい女の、精巧なるローマンチックの労働。詩だ。

謎は、思はぬ事で、解ける機會が有るものだ。

南國の女



日本海の蒼深い波濤に面した、北國の女は、色が白いにした處が、顔に險阻の點のあるのは免れない。雪の越後や亞いで金澤の女は、例の雪の肌の美人の多いので名高いが、北國だけに矢張り、目元に冷い難がある。髪は最も荒い北海の藻のやうに黒くて長いが。

そこへいくと南國の女は、同じ色白の美にも、茜の紅味がさして、皮膚に常に漂ふてゐる。殊更熱情をよばずとも、天性自づから表情的に成つてゐる。

私は之を、美しい浪と温かい花と謂つて置かう、どちらにも其の特長はある。浪は激して艶に凄く、花は情に火のやうに燃える。

日本海の側は、波と魚と肌の長がある。南太平洋の方は、花と果實と

美貌の徳がある。

多い頭髮は空の雲に喩へても、北美人のはパサ／＼して空氣の加減油の乗りが悪いやう。南國の女は濃黒濃艶の放棄に兎角櫛に亂勝であらう。今更、京都、名古屋の美人は珍らしくも無し。

私は女に關して、深い印象を残してゐる二つは、和歌山と伊勢の女である。

和歌山の女は、色は潮風に白からずむつちりと肉太で、血の循環が如何にも暖國的で、肉の匂が自然に溢れてゐた。

伊勢の女は髪は濡艶の色は白く、瞳は生々と優柔しう着物までも表情が滾れてゐる。折しも名物の蜜柑の花が香高く咲いてゐて、女の全體が

言葉まで皆情緒に輝いたので有つた。

私は、潮暖く黄の夏蜜柑實る和歌山は偕置き。氣候の温和に柑橘花咲き、濃い表情に富んだ美人の多い伊勢の國に、あのレモン花開き黄金色に實の熟するといふ、南歐の空を偲ぶ。

北國女に北歐のイブセン劇中の女主人公の様な女が出るには、未だまだ間がある事と思ふ。

心が弱くて底に熱が無い情緒的伊勢の女に、若し東京の氣強い女を加味したら、或は伊太利ダマンチオに在るやうな熱烈な女が出やうか。

鰯雲

君よ。春の海は如何？

都は今ま櫻の花は眞盛りだ。

君が漂泊の旅に上つてから、三度も僕は着物を更めたが、例に依つて憂愁の日を送つて居る。

折角、向ふ見ずの旅に出て、何が故に一個所に固定しては居るのか？僕の殆んど解釋に苦む次第だ。風に舞ひ落ちた三度笠が海邊の小村で止まつて動かぬとは奇體さ。

米が良いのか、美人が在るのか、野が氣に入つたのか。イヤ、元と自

然狂の君の事だから、矢張り荒海の景色が大々的に面白いものと見える。夫れにしても近頃聞きたいのは、例の白い齒をみせて泡を吐く君が氣焔だ。海に來ては盛なる大自然の前に定めて鬱勃たるものであらう。

然し、對手が無くては致方もあるまい。若し大雄辯の海が人間と言葉を交されるものならば、奈何に空前の奇觀であらう！ 波高き海、聲高き男、大方情無き雲も、砂も草木も共に手を拍て踊り舞ふであらう。

昔の人は激浪の前に立って演舌の稽古を學んだと謂ふ。僕は眞偽を知らぬが、確に之等の士は近世人よりは幸福で有つたに違はぬ。現在の者は夫んな馬鹿な眞似を爲るには頭腦が餘に智識的だ、自然を活きた物として観る事は能ない。

君は果して何と思ふ？ 萬有神教的、自然狂の君のことだから、詩的想像の乏しい今世俗人とは無論一致はせぬ。が併し、君も亦冷酷なる科學の鐵槌に頭腦の一角を碎かれた一人と懷ふ。

何様、自然を生物の如うに見た先人は幸福で在つた。此の世に人間以外に友あるの心地がした、海に對し、山に向ひ呼叫んだ人もあつた。野に咲ける一莖の百合花に頸を垂れて天地の神の心を悟り教を開いた基督は、最も先んじた人間悅樂者の第一人であつた。

風塵の都會に住つて、田舎の好景色を知らずの負惜みと僕を笑ひ給ふな。實際、自分も天地に對し漂泊思想家の一人だ、今は月にも花にも慰樂を感せぬものと成果てた。多分、海に往つても左程の興味をも覺えまい、

勿論二三日は轟く音を聴きながら滞留もするであらうが、其翌日は濱邊の岩石に腰を掛ける旅人の如う、また飄然と風と電とも分らずに立去るであらう。

友よ。斯の心事に成つたのを、御身が聞たら遙か海天の一角から奈何に感じるだらう？ 濤打騒ぐ其海の巖壁に凭れて一度考へてもみて呉れ給へ。君も僕と俱に廣い天地に宿も無い者とならう！

吾等は是に於てか遁れる途を發見せねばならぬ。生か死かならば、人一倍熱い血液を藏する吾儕は、寧ろ進んで大生の道を取らうでは莫いか。窮する獅子の態度を遣らうでは無いか。

此の自然に興を得ない頭を強て詩景の中に没しやうと、僕實は幾度も想ふのだが、譬へば土で拵へた人形が首を峙えて月下を彷徨ひ、花園の裡を歩いて行くがやうだ。凡て無益な譯だ、有繫、物に感じ易かつた時代を考へると襟に涙の落ちる心地もする。

友よ。其海の岩蔭に靠れて僕の爲め、亦君自個の爲に靜思し給へ。君は聖書を持つてるか、詩集を持つてるか、兩國で別れた時には鞆も荷物一個無つたではないか！ 胸に負けし魂の他何も其の懷中に金錢も餘り多くは莫つたと記憶する。

其時は恐くは、君は宗教を捨てたが、まだ詩神には未練が有つた、世に何物も要せない唯大自然に遁れ樂むとは矢張詩に生くる證據である。或は酒も女も含んで居たかも分らぬ。

頃日の君が寄せた書翰には、一向に以前の様に月や雪や氣候や、根柄ねっから詩的らしい言葉も尠少いのは夫の境地心持が異つたのだらう。如何、僕の手紙を見ても君は大に不可思議に感ずるであらう。

嗚呼、天地日月幾千年の舊の如く、其の下に神の教の聖書は未だ雲の様繁く世に流布してはをるが、之れは畢竟昔からの墮力に過ぎないのだ。否、思想の逕向に迷へる世界の憐むべき小羊が絶望的憧憬である、温味もない残パンで在るのだ、個人の眞價値、靈性の獨立心無き人の子が基督教に代らぬ神、平安慰藉を他に發見せないからだ。

印度の綠燃ゆる熱帶菩提樹の下、其地の火を欺く赤い艶麗なる花卉と、多數の傾國の美人王女を振棄て、寂滅、極樂の法を説いた彼の釋尊の教

も其の燈明の火と次第に世界から薄く衰へた。

加之、科學と文明とは、其の恐る可き絶大の力を以て、天地自然と其の美をも悉く打毀して了つた。否、今未だ破壊の斧を揮ひ進みつゝあるのだ。然り殺風景とは洵に善く謂つたものだ。

友よ。君は海邊に踞して、都の空に此の激動する當今思想界に觸れて噪ぐらしい僕を、或は嘯いて笑ふかも知れぬが、之れは僕の切實の告白だ。イヤ全く世界の蔽ふ可らざる自白である。

海邊ではよく貝が泡を吐くが、未だに世の中には其の小貝よりも劣つた、不平も感じも何も無い愚物の弱い奴は多數居る、頭臚の上に漸々潮流が乗越して來て今に驚き騒ぐ事であらう。斯うした人間こそ君の好い

笑草さ。

渠等を僕は呼んで、蘆の葉と稱へ、小禽と名ける。其れは思想の春潮に浸り騒ぎ、亦は常に波風に定めもなく浮沈して居るからだ。

友よ。高貴なる思念もなく唯臥て起て喰てゐる豚の如き生活の、都會に入るよりは尙海添の田舎の方が棲善いと云ふのか。夫れも無理ではない、僕も海に行き、山に入らうといふ考へが出ぬでもない。

併し、其れは所謂人世に破れたので、自然の空虚に遁れる敗北者に成るのだ、兎ても、僕の忍び得る處ではない。それで莫くとも吾人は冷い墓へ這入らねばならぬ運命だ。

君よ。都門へ再び還り來たまへ！ 海の澁へ情熱家の君を捨て置くに

餘りに惜い。洋は何も君の爲に騒いでるのでも、音楽を奏して居るのでもない。其の海よりも實に盛んな情意の胸を抱いて、早く市へ急ぎ給へ。何時か長い手紙に、君は海天に漲る鰯雲を濱邊に佇立み眺めると、我が激しい思想界の潮流を想ふと言ふて寄せた。

自然に遁れたと謂つても、君は矢張り愛世愛人の士であつた。到底世の中の石コロ木片のやう棄切れる人ではない。

去來！ 去來！

春風と共に、潮臭い袂を振って夙く京に歸りたまへ。都門の春は一層に濃く快よく、櫻は今ま花も人も狂して満天滿地歡樂の世界だ。

然し、之れが嫌だと君が言へば仕方もない。

なれど、鰯雲を望んで憂感一書を寄越した君！

還へれ!! 市には其の鰯よりも、雑魚よりも憐れな人の子の群が死を俟つではないか。

女乞食

こいしかは  
礫川傳通院は開帳中で金が落るだらう。

其の側の墓原に女乞食が臥て居る。算を亂す墓石の間に體を埋めて、細い腕は大きな墓石の上に掛け、髪は雑草の蔓と纏れ合つて、夏の夕陽は青白い顔を淋しう照す。向ふには、本空信士、本理信女の二つ並んだ

心中墓の圍ひから、香煙が糸のやうに立ち昇る。

女乞食は、此儘死ぬのではあるまいか？鐘の音にも、自分の足音にも目を醒さない。年齒は未だ十五六だらう！墓の色、面の色、白足袋の色、彼の女は全く死の界の人である。我も幽愁の漂泊人、女の上に熱い露がホロ／＼と零れた。梅雨空は復曇出して、雲から雨が二人の身に注ぎ濡らす。

自分は冷い手で、彼女を揺り起した。瞳は美しい光ありながら、色白の顔は、毒に毀されし哀れさよ。かれは今梅毒を病んでゐる。女の恨と何時か消えやう、兩頬と額が赤い腫物の色に染めてゐる。かれは、自分を刑事とでも思つたのか、亦是道が女の恥羞らつたのか、顔を草の中へ

埋て了ふ。

石碑の間に、悄として佇んで、漸く女の言ふ所を聞くと、我れは世を憤らざるを得ない。

女は、其の生國も父の名も知らぬ、母の顔は識てゐたけれど、八歳の時に、男と手を把つて遠い國へ奔つてしまつた後は、貧乏で過酷い伯母の許から、方々へ奉公に遣られた末は地獄屋で、今も迷へる乞食の身の境涯！ 夜は暗い暗い處で、男に責められる苦しさ。嫌だと云へば、打撲かれるか、首を絞められるか、其の代りにはお錢を與れる人や、食物を袖に入れて往く者もある。けれど、多分は犬みたいに、逃げて了ふ情知らず!!! 晝は此の顔で乞食もはづかしいので、夜は何處へでも連れて

行かるゝ牝犬、身持の姿の尙更晝は、墓場に隠れて寢て居るのだと……。爾り墓には血もない肉もない、女の肌が觸れても安全である。

自分は、妊娠と聞て甚く驚いた。女の十五六は未だ花の蕾で、實を結ぶ時でない。而も其れが毒の花で、毒の果だ。吁、悲惨！ 惡漢の娘は終に惡漢の子を生まねばならぬ運命か、乞食の兒はやはり乞食で身を果てやう。現時の社會は、之を如何とも爲し難ない。悲惨！ あゝ天、此の一人の少女を憫れまば、此夜、大に霜雪共に降つて、母も子も共に、氷と化した方遙に幸福でなからうか？ 我は悵然として空を仰ぐ。

耶蘇や釋迦が、人間靈魂の救主ならば、悲む勿れ女よ！ 其許は肉慾の濟度者である。家なく、妻なく、金なき野獸的の人間は、弱き君に依



て、性慾を満すのである。

眼を舉げて見よ、姿こそ艶なれ東西南北の青樓には、君の姉妹は千萬を以て數ふべく、美しい眸には涙を含んで、親と社會を恨んでゐるのだ。夜に罪と毒とが、臘脂と白粉と混つて世に流れるのも、男の罪の報いだ。世に男てふものゝあらん限り、娼妓も、地獄女も、君も、世間良家の處女の爲の犠牲なのだ。噫、君には唯眠るべき家も無い。

願ふは、君に美しい聲があらば、可惜瘡毒の顔を編笠に裏んで紅い紐、月琴抱へて、世にホーカイ節に出る事だ。數知れぬ男の憎怨を、天下に唄ひ歩くのも面白からう。

五月雨の夜の空霽れて、松の樹から墓の側面へ屈折する月光に、女乞

食の姿は、聖母マリアの如に、氣高く清淨に立つと見えた。

## 圖書館の日

友人が行くといふので、私は的もなく、圖書館に來たのだ。

早稲田文學一冊を借りて、阪本氏の手になつた―故青木繁君を讀んだ。天才の赤い血を盛つた、名は無かつたが青木繁てふ人間は、もう碎けて了つたのだ。私は泣きたい。

新らしい、媚を知らざりし若い藝術家、世間は物質上の苦痛を與へて追つた。青木君は、其の『世俗の苦痛を殆んどお茶らかし得た』……自分は

彼れの態度が大に豪かつたと思ふ。面白い、藝術家らしい一生であつたと敬服する。屹度死顔には、冷たい笑が、徽花の如に咲いてゐたと思ふ。

ふと胸すと、前後左右の長い卓に、種々の書籍とノート、若い人の顔が一パイに詰つてゐる。中年の悲慘の顔！ 廢殘の髪の毛よ。

私には、別の世界のやうな室内の空氣、白日の明るい光線が、閉ぢた一雜誌の上に落ちてゐる。

所在なさに、西の窓際に立つた。高い三階の下の緑の快よさ、梧桐、松、檜、檉、合歡木の若葉が、初夏のあるかないかの晝の風に、みな感じを持つた様にそよいで居る、町家のと異ふやうな雀が樂園に啼き飛ぶ。青い／＼空に、夢幻的な、白う溶いたやうな雲がフウワリ浮ぶ。

急遽に、青葉の底から、音樂が海の潮のやうに、私の耳穴へどよもし上つて來た。ピアノに、何か美しい樂聲を混へて、巨大な白壁岩の、音樂學校の洋館の邊りから、茂る葉の青層を渡り越えて……。私は兩手を面にあて、窓の所で、ウツトリと聽惚れて居た。

見えざる樂人の影、唇と指端、……。私は曾てこんなロマンチックの大曲を聽かなかつた。

少時、暗くなつた眼をあげて見た。向ふ遠くへつゞく鮮やかな新緑の果—廣く開けた、何色とも解らぬ温かい神祕の國、そこは、不遇な藝術の天才が永久に遁れる、天國の扉を私は眺めた。

三階の降口の石段で、『想像と創作力の無くなつた詩人に圖書館は墮落

だね』……私は友の肩を軽く叩いた。

卓の前

圓い卓のつやくくした上、ウキスキーの硝子の小蓋を置いて私の秋を味はつて居た。

蓋を指に捧げるやうに、凝つと透明な唇の切れるやうな色を見入ると、粒くらゐな小泡が三ッ固つてこぼれさうな面に綺麗さ！

私の瞳は明かに光つたであらう？ 天下に恁んな美しく強い味のものはない、茶花がたつたよりめでたく、私にウキスキーの吹けば消ゆる

泡球あわだまがうれしい。秋の夜を殺して電燈が煌々と白熱を落してゐる。

卓の向ひに、女が黙つて腰掛けて居る。鼻の小う尖つた眼の涼しい、麻髪の顔の蒼白い若い女中が、じぶんの紫がかつた縞の帯ばかり眺めて居る。

君飲み給へ、ウキスキーの壺を把つて私が注ぐ手を押へ、女はサイダーを奢つてくれと言ふ。思つたより氣の軽い女だ。

サイダーの瓶と、ウキスキーの壺と、電燈の下でかんけいがなく並んでゐる。

元は淺草の女優であると物語つた唇で、稀薄な曹達水を飲む覺めた青白い女を、私は哀れみたくなつた。

サイダー二本を呑んだ、腸の無さうな女を冷やかに見て、私は酒場カフェを出た。

## 犬

中入が過ぎた――

餘り廣くもない浪花節の寄席、ふかした煙草のけぶり、濁つた瓦斯に光る空氣に漂つてゐる。

茶碗の觸れる音、仲賣の煎餅菓子をかじる音、なには節の荒々しい刺

戟に酔つて、稍疲れのみえる男女の客の顔、あぶなツかしい安價の歡樂！

ペンコシヤンコくくく、調子の頗る高い三味線の冴えにつれて、痛快な凜とした節廻しのいゝ關東ぶしが……今や座長が高座に現はれた。

私は、第三人めの女浪花節の時から氣が附いた、席のズット後ろに、白い領卷に深う長い散髪を埋める様にして、ぢつと聽いてゐる漢が居た。貰盆が並べある側だ。

義士傳で、節が絶妙に入ると、渠は面をふいとあげて瓦斯に明るい高座を視た――眼の大きい口の尖つた、浪花節の男だ。私は度々かれが道路を流して歩く姿を見た。

派手な後幕、羽織袴の無理にもいかつい東京斯界の眞打、……客の末

座に隠れて、薄汚ない服装の大道藝人が居やうとは、知るやしらないでか、ますく美音秋の夜にさえて来る關東節の情調……

散髪頭が今は膝とすれくしに沈み被さる様、縦令名は無いにした處渠にも藝術家の矜りは有らう？ 只我慢に面と目を押へ殺し得ても、兩の耳は大きく開いて、太だ音響に震へて、パンの敵の妙調をば盗聞くらしい男の態度？ 義士傳の讀物が私をして左様に感せさせた。

私の背骨を靠せてゐる柱のまわり、席内の空氣に澱よどみくさつた人間の臭ひでなく變な香がする、鼻を横に向けると狭い庭地に一匹の黒犬が居た。藝人の通行口から這入つて來たらしい。

椽端に大きな眞黒い首、腮だけをぬつと突出して、私の顔を畜生が昵と視入つてゐる。

黒い金茶の丸い眼から涙が零れてゐるやう、息もせぬ風で向いてゐる、動物の臭氣を強くたゞよはせ乍ら――。

犬も、秋の夜道の淋しさから、人間の荒々しい安價な歡樂の場所の明るみに憧れ來たのであらう？ 鹽煎餅を投げてでも喰ひもせないで、私はこの時人間と同じ情緒が犬の面に表はれたのを、甫めて見た。

はねの太鼓で寄席が果てた。

私は闇の路を獨り冷たい穴の宿にかへつた。

## 鷺

厭世家杉田宗一は、今し方引越す所である。

彼は餘程變物で、——怎うして一人で一軒家に棲で居るか、怎うして三度々々の飯を喰て居るか、これは、界限の山神連近來の問題であつた。

けれど、最早、五分間の後では、此の噂も風のやうに消えるだらう！  
元々杉田其人とは、相互に面が人間であるほか、何の關係もないのだから。

荷物は、昨宵から整然と入口三疊に轉がしてある、只運搬の車が來る

のを遅しと、彼は待つばかりに成てゐる。

向家に朝の炊烟が、細い格子から幾條もの糸の如に洩れる。内には若い妻君が、所天の留守(?)に二人の子供を守して暮して居る。綺麗な袖無の赤坊を背負つて、後髪の立姿を認たのみで、未だ一度も顔は見たことはないが、聲は鈴のやうにやさしい美しい女だ！ 何となく聲に人を引着ける力がある。で、二人の子を、両手の花や寶と養育んでゐる様子！ 孤獨の杉田には、其聲が障子から道路一つ隔て障子に響いてくる度に、何と知らず床しく、人間戀しき感じがされる。『子供といふものは、ア、も可愛いものかな—母の愛！ 母の愛！』と、獨語つ事もある。そして、幼少い折に死別れた母親のことを思出す。『自分も那の様に、親鳩

が雛をするやう胸に擁かれて、可愛がられたのであらう!!』厭世家の杉田は、考へてはホロリとする。

尙一つは、隣家の職工だ。——砲兵工廠に通つて居るらしい——何故か獨身である容子、毎朝々々、夜の引明に爰の戸をトン／＼と叩く者があゝる。一日杉田は、自分の戸の隙間から覗いて見た。すると、豈計らんや、女だ! 若い娘が毎曉起しに来るのであつた。——女は煙草の工場へ通ふ風であるが、男の六時の出勤時間を遅らすまい心切から、有明、朝露に濡れたまゝ、人目忍ぶ後姿、男の名を呼んで、柔しい拳でトン／＼叩くのであつた。……神経質の杉田には、響く壁一重、夙く目を醒されるので、腹が立たぬではないが、朝の演劇の一幕! 其れに、美はしい趣味

も感じて微笑みもした。

と、杉田は古い柱に靠れて、惘然考へてゐる時、『旦那、遅くなりまして……』と、引越屋の爺が戸口へ來た。

机、夜具、柳行李、それ等が荷車に積まれた。

勿論、近所、隣へ挨拶して往く必要も無い。引越爺と物も言はない。荷物車がガタゴトと軌つてゆく。後に古びた夏帽を被て、ランプ片手に跟て行くのは勿論杉田宗一で。

臥ても、起ても、如何な場所に居ても、沈鬱して物を思ふのが此の杉田の性癖だ。誰か、大方此の男は墓の中でも考へ事をするだらうと云た位で。見ると、車の上行李の角から、眞赤な、シユレリの詩集の背が半

ば現はれてゐる。——彼が日夜愛讀の詩集で、血のない戀人、肉のない妻、而して寂愁の慰藉——シエレーの名を綴る金文字が、塵埃の中に旭日にキラ／＼輝くのが、杉田は太甚だ欣しく、何だか嫁入の荷の様に感じられる。十年前、彼は、初めて書店で此詩集を買て、壁を抱た心持で下宿へ歸つた事が憶出される。と、今度は、行李の片方の角には、古雑誌が種々と頭を出す。——彼の作物は其中に詩も散文も澤山載てゐる——が、其の多分は、古雑誌同様反古と化り、自任した金玉の文字も、何時しか塵と闇に葬られる運命を有するののか？ いや、啻に彼の物のみでない。心血を濺がれた、大方の作者のも、同じ哀れの運命を持てゐるであらまいか？ 炎天の下、彼は歩き乍ら、熾に興奮したとみえて、頬は

熱し、眼は異様に輝いたが、又片方の角から端書や手紙が、秋の木の葉に似てハラ々々と落ちる。『あゝ、破れ行李！破れ行李！』此の漂浪好の、主人公の御蔭で、國より國、處より處と汝は轉々として全くの老朽となつた（昔は清い河水の邊で、緑に生命の活々した戦ぎがあつたが）今は人間の手に繩に縛られ、損れ果てた哀れさ！しかし、見よ、眞實自分の心も傷き破れてゐるのだ!!!感情も言語も堰さゝへぬ、激流の如な彼は、俄に歩を止めて長髪^{かみ}を握り、暗然として頭を俛れた。雲の峯は向ふに高い。偶と、氣が附くと、引越屋の爺は、白いシャツと股引を汗にして、今にも死にさうな聲をハ、と出して、荷車を曳いて往く。廣い鏝の麥藁帽を食み出た胡麻鹽の髪から、頸筋へ汗の珠が滴れる。未だ道の十町も來



ぬのに、此の爲體いたらくなのだ。

感情の激烈しい、頃日憎人主義で疍癩持の杉田は、勃然として火の如に怒つた。白髪頭め！ 爺め！ 老人の癖に、車を曳くのが既に間違てゐるのだ、明日にも棺桶へ突込むべき脚で、一體、荷車を引ばるとは、馬鹿の滑稽のボンチ畫式だ。『この慾深の、業晒し奴！』大喝して彼は、老爺の背後から、危ふく打擲らんとまで意つた。

植物園の外側に來ると、青葉垣の處に人集りがしてゐる。袖の間から覗くと、一羽の蒼鷺が、小さな目を白黒さして、今にも死にさうなのに、溝溜の水を飲す所なので。一人の小僧が殊勝にも手に押へてゐる。

杉田は、『あゝ』鳥共の爲には、天の樂苑の植物園！ 自由の迅い翼を誇る、其の名尊い五位鷺でも！ 運の悪い日には、病むか何かで高い〜樹の絶邊から、念ひかけぬ地面へ落ちちる事もゐるのだ。翅が木片の如くで役にたゝなくなるのだ。

と、熟々考へ乍ら、老爺の方を、其れとなく瞥と視た。何だか妙な心持になつて來る。爺の瘦せ削けた、骨だつた尖つた青い顔が、不思議に鷺の面に似てゐる。

杉田は、今ま涙をハラ〜と零した。

鳥と人、老人、勞働、飢餓、死、『噫、悲惨の極だ!!』

彼は、全身の充ちた力を兩腕に籠めて、荷車の後から押してやる。蟬

がザッと焼き付くやうに鳴く、長い坂一つ二つを上りて過ぎ、目當の林町へ着た時分は、汗は血になつてゐた。恐らく、途々一斗の熱露を流したのであらう。

濃緑溢る八月、植物園の裏手にあたる、林町の住居からは、晝は森を中心、白鷺が鶴のやうに舞ふが、月の夜などには、空行く影も見えて青鷺の、グワ、グワと啼く聲が聞えると、何時も杉田は考へる。

『あの引越屋の老爺は、如何してゐるだらう？ 今日もハア、ハアと死にさうな聲で、例の荷車を曳いてゐるであらうか？』

## 雷鳴の夜

去月、雷鳴の夜。神田の友が家より『こんな晩だ、是非泊つて行き給へ』妻君が言葉を添へて牽留めらるゝ袖を拂つて、門を出た。

數十丈の煙突夜天に聳えて、身動きもせず空と地の中間に苦悶する砲兵工廠の側手に来る。空虚の電車が賣春婦らしい白首一つ窓に見せて本郷の方へ駛行つた。巡查の佩劍が晃る。

此時、雷鳴は未だ止まない。音響の雨に帽子を敲かれ眼を放つ遙かの邊際、壯熾なるかな巨大なる火柱が立つて居る。

星一ツ見える黒雲世界！ 灰色の怪しい雲の山が、頻りと猛烈に紅火

を噴いてゐる。立つては消え、消えては復た立つ。天人の苦惱は斯くやと嘲笑は爲なかつたが、闇中大道に獨り佇立んで余は、何様雷鳴電光の偉觀に霎時は見惚れた。

今にも急雨がやつて來さうな鹽梅に、稍足を早めて、柳町を指ヶ谷町の方へ坂筋を抜ける途端、果然、亂雲を割つて數萬條束ねたる金糸銀糸のやうな激雨が、吾身一人へと落ちて來た。痛快！ ドウセ濡れるのを厭はぬ白地の浴衣、人間社會の水でなければ、骨に迄も沁徹したかつたが、女の如うに誰を待つ新しい白木の檐の廊——而も艶な細い文字の瓦斯燈が夢のやうに點つてゐた。

奈何に驚くべき相違ぞ。尺前には雷鳴雷雨の闇黒世界！ 余は成可驅

を狭めて戸の方へ寄り掛る。雨は折々サット飛び來つて吾が濕つばい裾を濡らす、青晃りして電光は廂を掠めて長槍の如く余を脅かす。人は一人通行らない。

カラカラ／＼……深更、寂寞を破つて空車が一臺小石に響いて家前に留つた。

『やア、魂消た可怖い雷鳴だ！』

殆んど襪褌に包まれた車夫が、梶棒を卸して、御世辭して同じ軒下に這入つて來た。

『斯んな可怖い晩は、俺らハア初めてだ。雷は眞個に嫌やだ／＼』  
彼は、遅く客を巢鴨へ送つて來たのださうなが、途中此の雷で一時の

雨宿りを爲るので、性來の雷嫌ひは兎ても俥は曳けず、で、梶棒の鐵にピカ／＼反射して眼がクラ／＼、最早一步も足が出ないと云ふ。

『俺ア家は柳町で、直ぐ二三町ばかりですが、鼻と小供は今ハ一待つて居ますべ……』

仙臺辯で、車夫はそろ／＼惚氣交りに、泣きさうな聲を出す。

此の莊嚴再またと無き聖夜に、人間の惚氣など吐くと、雷公の恚怒下界に愈よ爆發するぞ！ と呶鳴ッてやりたかつたが、

『車夫、己の家は接き其處の原町だが、ドウか乗ッけて往かないか？』

『旦那、幾許お金を貰つたつて、何んで、此の雷に可怖くつて、俥は曳けませぬ。到底も嫌でがす』

彼は、國元仙臺で相當の商人だつたのが、遂ひ思はしくない所で、妻子と世帯を疊んで上京して復の失敗に、世の中に細い梶棒二本の車夫と成り果てた。物價は高いし不景氣で稼業は遣り切れないと額の皺を見せる。

余は些か氣の毒にも思つたので、

『四五町の所だ、賃錢は充分與るが、如何だ、一走り行つてくれ莫いか？』

『旦那、俺あドウしても行けません、雷はハア可怖い／＼』

斯う斷られると、余は少し善い心持も爲ぬので、懷中から墓口を取出して、紙幣や銀貨を瓦斯燈の光に大に見せてヤツた。

渠の眼は異様に耀いて、

『旦那、往きませう。幾許下賃さる?!』

余は俄に、忿怒心頭に發して、

『汝! 惡むべき金錢の奴隸!!』

家に待つといふ妻子。恐ろしいといふ電光。凡て金錢の前には瞬間にして忘れるといふ、卑むべき人間の屑!!

余は唇を嚙んで無言の儘、財囊から寸大の銀貨を數個擲出すや否、渠の垢面に抛付けた——青光に少し煌いて。

檐下を飛出して、道に拾ふ猿の如き瘦せた背部に、一時に、雷は激しく鳴つて猛烈な電光を浴せた。

神よ、黄金萬惡の世界を罰せよ。

鎌倉の半日

品川の海波、鈴ヶ森の松並木、新橋出て車窓から額の髪を上げて瞥見せしのみ。大船を経て青空に動く白雲、老松の翠、石の古色、身は既に歴史中鎌倉の人と成つて、鼻の端蒼々の空氣を呼吸する。

雪の下に、後藤宙外氏を訪ふ、折柄歸國中とて會はず。鶴ヶ岡八幡宮は一丁ばかり、來見る、流石源家の尊神の威風は残つて居るけれど、明治の吾等に唯美術の一塊物に過ぎず、多少色彩に魅せられた眼を轉ずると、階下公孫樹は新葉火の如く燃えて半空に高く聳えてゐる。

大樹を周匝つて霎時徘徊すると、涙俄に雨の如く滂沱として降つた、吾が朦朧の眼に、銀杏の一片々々が、開いた金槐集の一冊と見られた。左様、著者の實朝は此處に殺されたのだ。

實朝は吾が最も愛する日本の熱情詩人、其の生涯の薄命なりしに於ても、近來惜しい同情の涙を手向けやう。男は疊の上では死なぬもの、銀杏の下で非業を遂げた詩人も面白いが、余は流血の紅葉の中に放吟して死にたい。

けれど、敵手公曉も亦不平兒の骨がある。余とても現在、文壇の木葉蔭に態と身を窺して隠れては居るが、目的は他に有る、之を知るは獨り熒々の心のみだ。公曉よ、汝日本の小歴史の一小部分に、驕兒てふ豆の

如き名を残したは憐むべきかな。

盛なる覇業の跡は、麥畝となつて兎も走らず、薄ペラな木屋に人形のやうな男女が出入往來してゐる。

大佛と、伊藤銀月氏と、余と冷酒に鯛を嚙つて居る。二人は荐りに語つた天下の大野心と酒とに顔は早や眞赤、御輿嶽の頂から青葉を戦がせて吹く初夏の涼風に兩人醒めやうともせぬのを、眞黒々の大佛子傍に蹲座して默然と聴く。三丈五尺の大唐銅に笑はれて鎌倉中破れる様な音はせずすんだが、過失矣！酒の幾分は二人が踞した石に注いでた。吁、美酒、野心、余は瓢箪を打破らうとした。

由井ヶ濱、海水は昔乍らに騒いで日蓮の熱舌を傳へてゐる。風と浪と

は聲を限りに我が狂熱僧は何處ぞやと喚んでゐる、石までが千鳥を真似て叫び出しさう。友と別れてわが狂ふがやうな目に、青い波頭は悉な日蓮が首の如く顯はれ、満目の濃緑の松樹の影は其の法衣に似たり。頼朝何者ぞ、北條氏何者ぞ、山河佛堂抑も何ぞ？今に到るも鎌倉は日蓮の鎌倉だ、日蓮の獅子吼あつてこそ鎌倉は天下に名高く唄はれるのだ。嗚呼、豫言者の舌！此舌一枚が怖しい、長廣上下一轉に日本國土の大甕の水が沸騰して動いた。——正に棒の如く突立つ余が前に、今回は彼の案内者のやう靜に囁く。鎌倉を立去る前に圓覺寺に鳥渡寄つた。此處に間借りして正宗白鳥氏と亡平尾不孤子とが五六年前に居つた。鎌倉山の新緑に杜鵑は今年も啼かうが、不孤の聲は最う爲さない。初鯉は濱から市に上ら

うが、不孤の姿は再び此世に見られない。

明日、小石川目白僧園で不孤子の追悼會がある。

### 病院前

鷺と狂人病院に近かつた——小石川の家から私は麻布へ引移つた。東京の端から端で空氣がまるで異ふ、宿の門口できづくと向側に巨きな煉瓦塀の長い建物、それは赤十字病院であつた……煉瓦の色が巢鴨のほどに悪齧くはないが、不思議に病院と縁がある。

三日経つた、燕のような私もドコへも出なかつた。友を避け市内飄遊

の疲れから休養したいのだ。

浴後、はじめて宿の門を出た。少し横に、白や黒い物を着た人集りがして居る。新秋の紺青の夕の空に星が涼しい色を見せる。暫らく自然に觸れなんだ暗い眼に、病院の赤塀と人間の顔とが妙に蒼白い。麻布の町での第一の印象である。

小砂利の神経が尖つた様な地べた、其上に黒板の釣臺が置かれてある。中には人が臥てゐる、男で白い棒縞の單衣が被せて、頭部はみえぬが黒の冬帽が載つけて、足許には日和下駄が揃へて在る。死んでゐるのか生きてゐるのか判らなう。

釣臺は打棄てた儘で、人足が取りに來さうな様子もない。變死人のあ

る——病院附近の空氣に馴れてゐるような人達は、唯沈黙つて静やかにイんでゐる。桃色の少女の頬でも、急病人か死人に對し恐怖に色冷めもせぬ、麥藁帽をきたシャツの下町風の男が『死人』ですかと問ふた。

愈よ頓死人であるを知れた。土に釣臺のまわりの空氣の部分が、俄かに重洗んで、死の眞青の色が漾ひ蠢いてゐるやうに、私の過敏な瞳に映つた。夕暮に立つ傍の板塀までも青色がしてゐる。

小高く盛上つた、白縮の單衣の臍の所から、ヌット伸びた二本の足の青白さ！黄な肉色は失せて、汚い蠟細工のように少し脹味を帯つてゐる。死は見えた所に集まるのだらう、二本の脚が形容の出來ぬほどバカに凄

い、爪の色まで青死んで變つてゐる。



私は晝間の隣室の聲——皺唄れた咳嗽と、泣くやうな請求の客の語調『薬』『苦しい』……『茲は醫者では在りません』……などの言葉の端々を思出しながら、若しか少時で断られた客かと考へつゝ、暮中の釣臺から離れて并町を真直に往つた。

突當りが高樹町だ、左へ曲ると一軒の美術家の宅が在る。表面の角のところの壁の突出た檐、その少し下に石膏の馬の頭が喰附けてある。だいぶ白が薄黯うなつた石膏が、新秋の空氣に晒されてゐる。

美術家はどんな人かは知らぬが、馬の頭は固より、二方の硝子窓の中に見えるのが悉く石膏ばかり、それが私には最も面白く感ぜられたと同じ時に、妙な美術室をみた心地もした。今ま點たばかりの電燈が晃つてゐる。

外部から覗いてみる硝子のうち、真白い石膏のビーナス、裸體の女、小供、髪の毛の長い詩人らしい男の首、胸像……それに冠束の矢大臣に燈籠の石膏などもある。私の目には大臣や燈籠のやうなのが有るが不快に、また粗雑に哀しくも思はれた。

私にいつも石膏は、外の彫刻とはちがつて安價に見える、素い雑な傷まじさが怎んな型や像の表面にも浮いて、薄篤な悲みが淡々と纏うてゐる。——大臣や燈籠や日本の舊式な石膏の型を見ると、藝術家の古い心と腕、いやなく既に飽きあきしてゐる型に、不快となさげなさが一ぱいに成つて来る。

東京の街を歩いて、私は偶然にも屢々安價な石膏作りの家を見る、そ

れが皆まで揃つて小ボケな人形や何かの像型ばかりだ。生半これ等の職工が、石膏で以て西洋の眞似をする下手な技巧を、小美術家の生活を心から悲んだのであつた。

大詩人エーゴの石膏像が、本郷大學の赤門前に賣られてゐた、通行人の足の塵を浴びる廣い道傍に曝してゐるのが、詩人の威嚴のある皺の深い顔面が私の眼には、露店の細い赤い灯に涙ぐまれるやうにみえた。當時腐敗墮落をした佛蘭西の社會を叱罵した兩眼が、極東の國人の土足の塵に赤く憤り光るやうで、眞白い石膏の色が母國佛蘭西の純藝術の土を、慕ひ憧がれて悲むやうであつた。世界を照す尊重すべし古美術の様な星の輝やく下蔭に、一人の年若い平凡な顔の男が立番して居つた。

と、恚う考出して夥多の硝子内の石膏像を観る。明るい電燈の光線で、大かた髪は長いかと思はれる美術家の顔が見たくなる、柵や臺に据並ぶ種々の石膏の間隙から、私は敬虔な念慮をもつて夕景の中から透視つてみた。

しかし、私の何時も想像する髪の長う伸びた人は居ないで、小兒の首や、裸形美人や、詩人の胸像やが玻璃窓の閉切つた裡に、冷たく呼吸してゐるやうだつた。透明なガラスの中には寂しい冷涼な秋の空氣が一パインになつてゐる。

偽らずに言ふと、私は此種の石膏作は好まない、殊に通行人の目に附く處に多く並べ飾つて在るのが、安價な美術品である氣持がして、餘所

目にも溜らず面白く感ぜられない。

だけれど、青山の高樹町に棲む一美術家、有名か無名かは分らぬが、一方からみれば私に太だ石膏が懐かしい心持がする。無論、下谷邊りの小さな石膏店杯とは比較にも成らない。特に曲り角の表面に喰附けてある馬の頭が佳い、やゝ黝^{くろ}う古びてゐるのが深く趣味を興へられる、秋の青山高樹町の石膏美術家の宅の夕暮の灯……真白い石膏像に赤い電燈の灯が照付けてゐる。

此の石膏美術師の光榮と幸福を、私は胸に窺かに祈りながら向ふに真直に歩いて行つた。曲り角の出窓の上方に喰着けられる、少し黝^{くろ}う古びた石膏の馬の頭に、寂しい秋の憂ひの味と詩の情を含めながら私は明る

い交番を折れた。

もう頭の中と夕べの暗さはびつたりと一緒になつて、高い大きな塀の上から、秋の眞黒い一葉が風も無いにヒラ／＼と舞落ちた、空には雲が出てきたやうだ。

廣い草原に出た、本尾の原といつて、青山脳病院の建つてゐる原である。急に向ふの病院の中空から鋭どい、尖つた薄赤い牡丹色の燈火が；十個ばかりも偶と仰見る私の暗い瞳を射た。眼の球の底に脳病院の狂ふ紅い火花を注込まれて、闇を歩いて來た、原の濃い闇に突立ツた私の眼を嚇かした。

赤坂青山といふから、西洋の或る光景を聯想されるのに、この本尾の

原は廣い四方イヤ圓いといつた様な地に青草が、むしやくと所きらは  
ず長う生茂つてゐる。よし訝えた満月の光でも、此原の雑草の根元にま  
で照込みはえない。

こちらから視廻すと、二方は街道に添つた建家で、向には草地の中から  
七八軒の二階家に細いランプの灯がぼんやりと點つてゐる。草の平面か  
ら急に崖のやうに傾斜をした處は、暗の深さは幾らとも知られぬやうで  
ある。蟲はたぶん其のどん底で啼いてゐるだらう、私の足許の闇では周  
りの草續きに咽ぶやうに合奏する。

脳病院のあるのは敢へて何等の係りもないが、本尾の原には日暮前で  
も、外の東京の草の平地とはちがひ小供等が多く遊んで居ない。白い人

形のやうなのが遊んではゐるが、青い雑草の原がダ、廣いからポツンポ  
ツンと人形が唯淋しい、長い草の蔭にかくれる魔物が出て吸つて了はな  
いかと、夕暮の色が急に濃くなつた時は神経の鋭く尖つた眼には疑はれ  
る。

本尾の原のむしろ黯いやうな草とは別に拘りもないが、此原の上には  
いつも定つたやうに白や黒や濁りぬいた泥雲が湧きどよんでゐる、私は  
こゝを幾度となく通うたが、未だ一度も風のあつたのを知らぬ。夏の蒸  
暑い夕景に通つたをりは緑の草いきれが強く青臭くて、雑草にもきたな  
い異性があつて互に呷やき草々が小摺れ合ふやうだ。とても雑草の眞中  
は夏の湯上りの肉足で觸れば妙な感覺で歩かれなんだ。

晝間まだ脳病院の門の附近へ来てみぬから、壁の色がどんなであるかは判らない、しかし巢鴨病院のやうな赤い煉瓦で取廻してはない、夜目にも其れはきつと白壁か何かに違ひない。秋の夜の闇を通して冷たい壁の色は狂つてる様に、私の昂奮した光つた瞳からは打眺められる。

青山脳病院の建物は巨きな西洋造りで、廣い院内の所々に頂端の尖つた細高い塔のやうな物が立つてゐる、黄白色な柱電燈の光線でその塔の壁色が青凄くて、塔自身の頭の方には此れは瓦斯ともみえる幽霊の陰火の——而し眞純の青白色の妖火がポーツと薄柔かく燃えてゐる。

病院の高い幾つもの明るい窓……普通の燈火といふよりか私の瞳からは寧ろ紅ゐるの火で、熱帯國の五月の夏花の咲満ちたやうな牖火が、ぼん

やりと然し稍大きく建物の周圍に高く點されてゐる。脳病院の厚壁のこちらにも飛々に柱電燈が煌いて、その黄が、つた鋭い光は、何箇もの高い塔の端と、いくつもの窓の華の狂ふ妖火と三つ一緒に靜かに照しあつて、青白い大きく凹凸した脳病院の建築と壁を狂亂に導いてゐる。

一たいに此の病院の方には、何等の關係もあるまいが別の西洋造りが見える、これが窓には秋の宵闇に燈はついて無いが物寂しい。高いく鋭く冴えて特殊に晃る大きな七つばかりの星が、黒雲を光に切裂いて脳病院の赤い電燈を照してゐる。この見上げる星の光に私の瞳までが電氣の火に赤う映つる。

私は此の本尾の原は初めてだから、草原で方角も分らぬ、態と定めや

うとは思はぬが確か西の空に薄鼠色の……大きく擴げてヤケにぼかした様な怪しい雲の底から、キラリ／＼と刻を置いて紅の模様のやうな綺麗な、しかし天界の艶な凄い稲妻の光りが洩れる、私は未だ曾てこんな強い美しくい狂熱的の光りを見たことはない。疎らな眞黒な木の葉の端から、私の眼の球までを射貫ぬくのは欣ばしい。

また一方の部に凝固つた小雲には剃刀のやうな細織い三ヶ月が引懸つてゐる。

冷たい秋の夜色に狂つてゐる脳病院の草場のあたり……白う動く衣の影は看護婦の姿だらうか、闇にひつそりとして壁と草と密接してゐるばかりで、何の物音もなく青白いのと赤い妖火が高く燃えて見える。

脳病院の高い小窓からは、青山の蒼白い墓地が狂人の鋭い光る眼に鮮やかにみえるさうだ。

私は潤い草原を横切つて電車通に出て、態と青山墓地どほりの青白い瓦斯燈の下蔭を歩いて、ウラ哀しく歌ふ秋の夜露の青蟲を聴き傾きながら、霞町から宿の所まで歸つて來た。

ふと私の踏止つた門側の土が、先刻の暮前の死人の釣臺の置棄てゝあつた處なので、私は不意に驚いて跳上つた蒼い顔を宿の門柱の電燈に照し付けた。

## 九十九灣の一夜

今月の雑誌に能登九十九灣の寫眞が出てゐた。手を海の上に當てると、指の間から、波が白う音して打上げる、而して手の全部が濤に浸ると、余は身體を蒼々した波間に投込みたく思つた。いや、濤の裡から、長い黒髪をもたげて、懐かしい女の顔が現はれた。之は無論想像だが、實は自分が先年九十九灣の曾遊を心に浮べたからで。京都の聖護院の草廬、親みなれた畑の、濃紫の茄子の花に一滴の露を呉れて、人間には友にも別を告げず、いそげる足音に、千年平安の神を驚かし、七條停車場の汽

車の人となつた。

行手は、日本海の黒波狂濤を観るにあるので、余が心は既に躍つた。琵琶湖の青い鏡が、姫様の胸の如にみえて、これが、日本人の好む所謂風光明媚の穩かな、理想境だなど、海賊的霸氣を愛する余は、罵倒して過ぎ、米原に着。北陸線は、蠻地に入る氣持がして何となく欣しい、關西の土地とは匂ひが異ふ。粗荒なる自然、草木も亂雜で山河の形勝も自ら規模が大きく、余が如き奮闘的の者、白粉臭い文明を厭ふ者に取ては、甚だ愉快を感じる、況んや、今回の旅行は、人間の總ての情縁を忘れて、實に、世間一切の結縛の繩を斧に斷つて、日本海の波濤に接するといふのである。冬ならば越後名物の雪に熱血の身を埋めて、風雪と闘ひたい

とも思ふ。金澤迄は何處にも下車せず、金澤を一見した後、片山津の温泉、山中の湯に遊んだ。湯が温くて成程温泉だと思つた。余が如き胸に沸きかへる苦痛と、熱血を藏する者には、斯の様な湯は少しも皮膚に感せぬ。嘗て、上州草津の（淺間の山では火となり、平地では熱湯と湧く）彼の有名なる、熱い泉に平氣で飛込んだ自分だもの——全ての物は衰へた、地球（圓いのが業に平凡）の熱も漸々褪める、人間の熱も美も次第に減じる、情も亦爾りだ。併し、少くとも余一人は、永久に冷えぬ積りである——余は渾身の火と血とを以て、總ての物を焼かう、腐敗したるものに、火の洗禮を施すのである。いや、余にも亦呪ふべき人間の苦悶あり、日本海の蒼波に熱き身を浸して、憂惱と顔を洗はむとする。都人よ、太

陽が波に沈むやうに、この壯觀を誰か見る。蟹も驚き、禽は騒ぎ、海神も貝を吹く事を止めて、熱血詩人が、海も嘗て知らぬ萬丈の飛沫を上げて、潮水に浴するのを視るであらう。で、兩温泉は、軟弱なる人間にこそ好適だ、余には向かないと、鳥渡鷺のやうに、足を濯いで立去つた。病人には随分効能もあらうか？愈々能登に入つて、余が平生愛慕する、英雄詩人、彼の謙信を想ふた。寔に彼れこそ余輩の話すに足る詩人だ！劍の人、筆の人、今の世に此の人あらば、渠が往年、金甲悍馬の間に、嶄然頭角を抜いたやうに、現に目下平板な詩壇の寂寞を破るであらう？！余は今、能州の月を仰ぎ、彼が世に貽した例の得意の一詩を吟じて、古今の情に袖を濡らした。——吁、人間を思はぬ自然旅行に出て、涙を流す



とは、余も亦弱かりし人の子かなと、胸を叩いて自らを痛罵したのである。こゝ能登の七尾は、狭い所なれど、青樓は中々に賑かに盛だ。誰が賣られた薄命娘の謠ふ唄ぞ……二階の障子に映る客の影、三絃の音が海の音と和して、一種の悲調を發する。余は、雪國の女は、顔の白い美人が多いかと想つて月にスター／＼と此街を去つて、知名な和倉温泉に一夜を明かした。

和倉温泉を、燕と共に立出てた。片手に静かな海を眺め乍ら、雲吹き拂ふ涼しい風に帽子を弄らせつゝ、或は種々の貝を拾うて小兒のやうに口に海の笛を鳴らしたり、道一面に咲いて死を恐れぬ小さな花に、草鞋の底を紫に染めたり、僅か一里に足らぬ海道を、浪が千回も濱に打ちか

へす程を経て穴水の港へ着いた。

穴水は名ばかりの船泊りで、昔風の宿屋が二軒もある。欄干に晒してある赤い襟の蒲團には、幾多旅人の涙の痕があらうか？など懵然と立てゐる間に、小蒸汽がポーツと音をさせて、見も知らぬ遠客の余を迎ひに來た。

汽船には、美少年のボーイが居る。中々快活な兒で、面は些と日に焼けてたが、黒瞳勝の目は凜として、齒は眞珠のやうだ。わが都會には斯んな少年は見られないが、所詮、其の活潑なる行動も、言語も、悉な波濤から習つた故であらう？！九十九灣を観る事は後にして、汽船が着いてから、飯田といふ所へ往つた。途に銘酒の良いのがあると聞て。其家に

立寄り一杯々々と傾くるに名に違はぬ芳醇甘露の味がある。天國にはいざ知らず、地上到る處黄金の小壺はありと、更に一杯を傾け、これが眞個の千鳥足だ！と海添の道を蹠跟として飯田の街へ來た。

刻は夕暮で、ドンドン〜と可笑な騒がしい音がする。海の調子でないので、晚餐の膳の側に畏つて居る小女に、「あの音は何だ？」と訊ねる。少女は此邊の者でないらしい。あれは今飯田の町に芝居があるので、中々賑かだ！と答へる。「お前は其れを觀たか？」と聞くと、田舎にゐて生れて未だ看ぬと袂を咬へて首を下げる。「よし！」

芝居は所謂蓆掛けで、釣カンテラが舞臺一面に、テカ〜と煌つてゐる。油煙が黒々と散亂して、折角の花形、姫君の白粉の顔を、滅茶々々にするのを御存知ないか？余は、彼の宿の小女を連れて、塵一枚の地面の上に座つて見て居た。すると、彼方此方の袖の間から、眼あつて、余等の方をジロ〜と物珍らしげに眺めるのである。判めた！此所では、宿の女中が客が演劇見物させる杯は開闢以來無い事であらう、余は頓だ色男役になつたのであつた。——嗟、海邊の田舎に女（優しさを神に謝せよ）と産れて、一生、綺羅の香を覺えず、芝居の華やかさをも知らずに、惜しや青春を浮世の濁つた仇浪に揉れ〜て果るのであらう……。余は宿で眠てから、可憐な女の運命を考へた。床に生けた紅い花が衿りげに見えた、爾り汝は人間よりも幸福である。

翌、未明に飯田を出立つた。昨宵にかはる海の音！人間の柔弱なる情

の響は更らくない。余は、之より天に高さ狼煙の燈臺に急ぐのである。心は雲のやうに溢れ、脚は矢の如く走る、汐の朝風に袂を翻して、沖往く孕帆と競ふのである。波路の隔なくば、海に世渡る船人に聲を懸けたくも思ふて過ぎる。この海の附近は、斷崖絶壁を成した處や、青草に色々の花を點じた丘もある。で、草鞋は早く貝殻や岩角に千切れて用をなさない。——縦ひ踵に傷き、蹠は破れて海道の岩を悉く血に染めるとも、荆棘塞つて道無き今の冬世よりも樂だ——二里ばかり來た丘の中腹で、一人の牧童に逢つた。襤褸の衣に繩の帶、花の枝を鞭にして馬を守つてゐる。あゝ、幸福なる自然兒よ！余が猛烈な炎の意馬も、若し君の如きあらば暫時は、憤怒と悲哀とを忘れ、人生の花野に横はるであらうか、

是に於てか、余は又起る人間の情を冷い波に洗つた。

狼煙の燈臺の偉觀は、凡人の魂を駭かすのである。蒼か、黒か、海妖の髪のような藻が浮んでは沈み、狂瀾怒濤際涯なき日本海を前に控へて、岬に、燦然たる燈臺の尖端は昂く天を指してゐる。月光は之に當つて波上に碎け、白鳥は光を慕つて撃ちて死ぬのであらうか？正に沿海第一の燈臺だとか、宜なり、火の狼煙の燈臺の稱や。

北國でも女は知らず、色の塗物で名高い輪島に行く途中である。余は、旅も既ら衣は鹽垂れ、疲れた足を手負の鹿のやうに曳いて、とある岬の頂に突立た。此時の感想……今尙ほ、肉震ひ骨鳴らんとする。

白きものあり、余の汗にうるめる目に迫つて來る。物に敗け嫌ひの自

分は、全力を瞳孔に注いで見返すと、鷗だ！白鷗が一羽、劍の如く弓の如く翅を擴げて、嵐と浪に闘うてゐる、偶々自由の笛を鳴らして、丈餘の巨濤を愚弄してゐたのが、余の怪しげの姿（鳥から見れば、人間は兩手兩足の變な動物だ）を巖上に認めて、鳥め——戦争を挑むのであらう？！汝、大膽なる海の鳥よ、汝は茫々たる海原の何處で生れたか、卵子が浪と風に破れてから夙く、汝は戦ひの運命を有してゐる。親を知るまい、平和を知るまい、併し汝は、漂蕩無限の太平洋に覺束なき様も見えぬ。實に、爾は海上の勇者である、曾て紀伊の海で、余は岩の海鷲をナポレオンと呼んだが、偕鷗を何と歌はう——吾は父を知る、母を識る、けれど、吾が胸の焔の如き、嵐の如き思想は、那處から得たかを知らぬ、亦何處

に往くかも分らぬ、晝も夜も唯に燃え、唯に荒れてゐる苦痛煩悶!!鷗よ、汝の胸を裂くも、單に冷い血が滴るのみだ、汝は余が前に翼を折て降伏すべきであらう。と、爛々たる眼に射られて鷗は雲に姿を隠した。

今、余が立つ岬の端は、誰も冒さぬ堅固な王座である。東方の煙か波かを破つてはの白う月が現はれた。夏の夕の日本海の風!額に蔓る、長髪をそよかせ、わが魂を天外に飛ばしめる。吁、此の境地、鼻に塵を吸ふ人間の解する所に非ずだ。月光に照れる余が額は、恰も大理石に似て麗しからう、出でよ海の妖魔、吾が蒼白き頸を捲いて、波底に沈めよ。人間を忘れし吾が聖き容貌が、月の鏡に映らぬ恨み、銀の波に影せぬ怨み、今宵人間の宿に夢みるのが厭はしい。あはれ、彼のバイロンの絶叫んだ

如く、此の巖上に（夜露に濡れて）白鳥のやうに死せんと欲するのである。パイロン！熱狂兒パイロンは、聲を極めて海洋を讚美した。なれど、渠は海よりも豪かつた、海は頭を低れて、彼れの名を全歐に傳へ轟かした。余は巖にわが名を刻んで、月夜の海風に、飄々乎として一里二里、こゝも月の輪島の客となつた。

九十九灣に船で着いたのは正午頃、乃ち、灣口の小島の旗亭に押上つた。二階から四方を見渡すと、灣内波油に似て青う、白帆が荷物を積んで徂徠するのもある、風景洵に天空海濶だ。余は何時しか、徳利の白帆と、三味線の檣の間に圍まれた（後にて聞けば、島は淋しいのと人戀しいのとで之が習慣ださうだ）歌は海の如に湧く、女達の唄ふを聽けば、

皆島に買はれた籠の鳥で、有繫^{さす}哀れに感じられる。越後の女、東京に栃木に、九州博多在の女もある。彼等は酒と歌とで客を攻める。いや、能登の果の小島の中では、人間而も弱い、心細い女性の真情が、歌となつて流露するので、其の言葉が國々に依て異ふ丈け、感情を増すので、海を家とする赤銅漢の船乗も、涙を荒布に霑すこともあるとか、余は、悲哀な曲に感熱して、人間の肉を賣買する現代の悪制度!!皿に山と盛る刺身の一片を箸にして、チエ！と投つたのが、障子の棧に留つて、夕陽に瞭かに、蛞蝓の様に見えた。——其夜は歌と哀情に亂酔して、廣い青疊の上、月と共に丸寝して了つた。

夜が明けて、いざと小舟に島を去る折、女中共が、水に落るほど立寄

て別れを惜んだ。余は「皆を連れて、舟で逃げやうか?」と冗談を言った、主婦は苦い顔をして彼方を向いた。

島の影も今は見えす。あはれ、五人の女の影!

噫、九十九灣の一夜は、自然旅行に反いた人情の短い夏の宵であつた。



明治四十五年五月十二日印刷  
明治四十五年五月十五日發行

現代文藝叢  
第十一編(哀花熱)  
定價 金貳拾五

著 者 兒 玉 傳 八

東京市日本橋區通四丁目五番地

發 行 者 和 田 靜 子

東京市京橋區月町二十四番地

印 刷 者 金 子 久 太 郎

東京市京橋區月町二十四番地

印 刷 所 三 協 印 刷 株 式 會 社

東京市日本橋區通四丁目五番地

發 行 所 春 陽 堂

電話 本局五十一  
番口座 東京一六一七

豫 告

小山内薫著

現代文藝叢書

第十一編

霧

積

『霧積』はまだ世間知らずの或少年が碓氷の近くで、ごまのはいに附けられた時の話。『東京へ』はその少年が生活の苦勞を嘗め始めた時分のいらくした心持を書いたもの。二つ共にいづれも著者が開拓して獨り其權威を擅にするを得る新境地で、決して他の入ることを許さないところである。

